

# 西トツプ遺跡調査修復 中間報告 11

## —中央祠堂躯体部再構築編—

*Survey and Restoration of Western Prasat Top Interim Report 11*

*Reassembly of the Building Frame of the Central Sanctuary*

奈良文化財研究所

2022



# 目次

## 第1章 西トップ遺跡の調査と修復

第1節 修復の経緯	1
第2節 中央祠堂修復調査の進捗	3

## 第2章 歴史的な遺跡と窯跡に関する最新の調査

1. はじめに	10
2. プロジェクトの進捗状況	10
3. プロジェクト参加者	10
4. 作業内容	11
5. 窯跡の発見	16
6. 民族学的観察	17
7. 報告書の執筆	17
8. おわりに	18

## 凡例

1. 本報告書は奈良文化財研究所が令和3年1月から令和3年12月にかけておこなった、西トップ遺跡中央祠堂躯体部の調査修復の記録、第11冊目である。
2. 解体修復に際しては、現地文化財保護当局である APSARA（アンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備局：Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap）の全面的な協力を得るとともに、日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JASA）の技術的な支援を受けた。
3. 本書は解体修復に直接関わった企画調整部佐藤由似、現地調査員 Sok Keo Sovannara、客員研究員杉山洋が関係する研究員の助言を受けながら執筆と編集に当たった。図版の写真は上記担当者と現地のカンボジア人スタッフの撮影による。
4. 今後、調査の進捗状況に合わせて、随時、各報告を上梓したい。

## 第1章 西トップ遺跡の調査と修復

### 第1節 修復の経緯

平成13年度、奈良文化財研究所は現地の文化財保護組織 APSARA（アンコール・シェムリアップ地域遺跡保護整備局）と協議をおこない、アンコール・トムの遺跡群の中でも遺跡存続年代が比較的長く、仏教的な要素も濃い遺跡として、西トップ遺跡（第1図）を調査対象地として選定することになった。

西トップ遺跡は、アンコール・トムの中心寺院バイヨンから西門へ至る東西道路を西へ500m、南へ50mほどの位置にある。これまでその存在は知られていたが、詳細な調査研究がなされていなかった。アンコール王朝の局勢期であるバイヨン期よりも後世のポスト・バイヨン期以降も存続したとされる遺跡で、当該期のアンコール・トム内の遺跡のあり方や、アンコール王朝崩壊後にあたるポスト・アンコール期をも対象に含める広範囲な時代が調査対象となった。平成15（2003）年8月の第1次発掘調査を皮切りに、考古学・建築史学・保存科学などの面から鋭意調査を進め、平成22年度にはそれまでの調査結果をまとめ、日本語版と英語版の報告書を刊行した（1、2）。

2008年5月26日、中央祠堂東側破風部分の石材40個あまりが落下した。その前々年にカンボジア側により中央祠堂頂部に繁茂していた樹木が伐採されたために、樹根が抱えていた石材が不安定となったため崩落したとみられる。この石材落下に伴って、かろうじて均衡を保っていた中央祠堂上部の石材全体が不安定化した。急遽、APSARAと協議を重ね、日本国政府アンコール遺跡国際調査団（JASA）のご協力を仰ぎ、独立行政法人第3次中期計画（2011年度から2015年度）より修復工事に着手することが決定された。



第1図 西トップ遺跡修復前風景（南東から）

修復開始にあたっては、中央祠堂と比べ小型の南北両祠堂から着手することにした。南北両祠堂では、南祠堂の方が躯体部の残りが良好であるとともに、石材が大きく解体の手間が北祠堂と比べ少ないと推定されたため、南祠堂の解体修復で工法・進行等の習熟度を高めた後、続いて北祠堂、中央祠堂の順に解体修復を進めることとした。2011年12月14日にAPSARA・東京文化財研究所・奈良文化財研究所間で新たな覚書を交わし、2012年3月9日より南祠堂の解体作業を開始した。

南祠堂は躯体部・上成基壇・下成基壇からなる。屋根にあたる屋蓋部はほとんどが失われ、躯体部は南に約19度傾いていた。上面から順に1層ずつ平面図作成、石材番付、解体を繰り返し、躯体部の解体を進めた。躯体部解体後は、基壇部の調査を進めた。下成基壇最上面は砂岩敷石面であったが、不等沈下を起し、中央部から南にかけて20cm以上沈下した状態であった。敷石面を解体すると、基壇内に充填されていた基壇土が粗砂であることが判明した。この基壇土を発掘すると中央祠堂下成基壇の南階段が検出された。基壇部の最下層解体後、現基壇の南側延石直下から基礎の掘込地業が確認されるとともに、石列が検出されたが、それ以上地下に続くものではなかった。2014年10月からは基壇下の地業部から再構築を開始し、2015年9月23日には南祠堂の調査修復を完了した。

2016年2月、北祠堂の解体に着手した(第2図)。3月には順調に躯体部の解体を終了するとともに、周辺に集められていた散乱石材の番付と調査をおこなった。北祠堂は全体が北側に倒れこんでおり、躯体部の崩壊が南祠堂と比べてより進んでいた。躯体部の解体が終了したのち、基壇部の調査に取りかかった。基壇の築盛状況を把握するため、南北にトレンチを設定したところ基壇地下にレンガ造遺構が存在することが判明した。発掘調査を進めたところ、レンガ2m四方、深さ約1.5mのレンガ造の地下室状遺構が検出された。床面直上からは金製品をはじめとした金属製品、水晶、ガラスビーズ、焼骨片などが出土した。また、レンガ造遺構ならびに出土遺物に被熱の痕跡が認められ、多くの炭化物の出土も確認した。

レンガ造遺構に関して詳細な調査をおこなった後、遺構保存のためにオリジナルの赤褐色粗砂を主とした改良土で埋め戻し、基壇の再構築をおこなった。躯体部の再構築に際しては、東正面を除く3面の偽扉全てに如来立像が彫りこまれていたことが判明した。周辺の散乱石材の調査を経て、崩壊していた北面も含め全ての偽扉を復元することができた。2017年12月に北祠堂再構築を完了した。

(1) 奈良文化財研究所 2011 『奈良文化財研究所学報 88 西トップ遺跡調査報告－アンコール文化遺産保護共同研究報告書－』

(2) Nara National Research Institute for Cultural Properties, 2012, *Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site.*



第2図 北祠堂修復前(左)、修復後(右)(東から)

## 第2節 中央祠堂修復調査の進捗

2018年1月より中央祠堂の解体調査を開始した（第3-6図）。これまでの南祠堂、北祠堂と同様に上部から調査・解体し、順次、地上のコンクリートベース上で仮組をおこなった。躯体部解体後は、基壇部上面の調査をおこなった。調査の結果、上成基壇中央には近代に開けられたとみられる盗掘坑の存在が明らかになった。このため、発掘調査の後に盗掘坑を改良土で埋め戻した。

基壇部外装の解体にあたっては、20世紀前半にマルシャルによって指摘されていた仮説である、中央祠堂の砂岩外装の内側に別のラテライト基壇が存在する可能性に注意を払う必要があった。先行調査の結果、実際に砂岩外装の内側にラテライト基壇の存在を部分的に確認した。そのため、調査の手順として、砂岩外装のみ順次1/4ずつ解体し、順に露出したラテライト基壇の調査をすることとした。

その結果、ラテライト基壇も外装の砂岩基壇と同様に上成、中成、下成の3段構成であることが判明した。ラテライト基壇の保存状態を精査した結果、ラテライト基壇は解体せずにオリジナルを保存するため、必要な箇所に対して一部修復を施すにとどめた。このラテライト基壇は、再構築に伴い、砂岩外装で再び



第3図 中央祠堂修復前状況（東から）



第4図 中央祠堂修復前状況（北東から）



第 5 図 中央祠堂修復前状況（南東から）



第 6 図 中央祠堂修復前状況（西から）

おおわれることになるため、3D 測量、写真撮影なども含めた可能な限りの記録保存をおこなった。東正面に関しては中央祠堂基壇部と接続している仏像台座とその周辺の発掘調査をおこなった。

### 中央祠堂の再構築

中央祠堂基壇部の再構築は、下成基壇の砂岩外装から順に進め中成、上成基壇、その後に躯体部へと進めた（第7, 8 図）。躯体部は開口部とその上部に設置されるリントルを境に構造が異なるため、躯体部上部と下部に分けて作業を進めた。第 25 層から第 16 層までの躯体部下部の再構築では、東西南北各面の開口部にあたる扉枠を先行して組み上げ、その後に壁面を積み上げていった。このうち、破損や劣化により再利用が困難な部材に関しては、接合または新材に置き換えている。

開口部の扉枠・コロネット・リントルは、他箇所で使用される灰色砂岩とは異なり、赤色砂岩が使用されている。このうち、一部のリントルとコロネットは、他のペディメント材などと共にシムリアップ市内のアンコール保存事務所に保管されていた。文化芸術省と協議の上、これら装飾石材に関しては、西トップ遺跡現地に返還し原位置へ戻す方針となり、2020 年 10 月にアンコール保存事務所から西トップ遺跡に移送され、再構築のため現地で修復・接合作業を進めた。2021 年 4 月より開口部上にリントルの設置を開始し、躯体部上部の再構築作業へと移行した。



第7図 中央祠堂修復作業風景  
(北西から)



第8図 中央祠堂修復作業風景  
(東から)



## 躯体部上部の再構築

躯体部上部は第15層から第8層までで、第1ペディメント部分もここにあたり（第10図）、東西南北各面の開口部上部に配置される。第7層から第1層にあたる屋蓋部には上層の第2ペディメントが存在したとみられる。調査開始時には既に石材の多くが崩落し、多くの欠損部材が存在した。それら過去に崩落した石材は、20世紀初頭のフランスによる西トップ遺跡整備の際に除去され、遺跡敷地内にまとめて積み置かれている状態であった。再構築にあたっては、千を超える崩落石材の中から、中央祠堂躯体部上部に該当する石材を探し出す作業が必要とされた。そのため、コンクリートベース上に仮組する際に、欠落部分に一点一点あてはめていく作業をおこなった（第11図）。また、アンコール保存事務所に保管されていた部材のうち中央祠堂のペディメント部分に該当するものは、仏陀像など図像の中核を担う部材を多く含んでいた。ペディメントの一部はフランス極東学院による古写真に記録されていたため、解体前の躯体部上部の図面と古写真などを参照しながらペディメントの再構築をおこなった。



第9図 中央祠堂古写真（北東から）  
(EFEO\_CAM01489)



第10図 中央祠堂躯体部上部解体前状況（北東から）

## 第1ペディメント詳細

### 東面（第12図）

第1ペディメントは、他のアンコール遺跡に見られるペディメントと同様、帯状装飾で区画された龕内に半肉彫りで主題の図像を表現している。ペディメントの両端には冠状の装飾を冠した5頭のナーガが立体的に表現されているが、これらの構成は第1ペディメントの4面共で共通である。東面ペディメントは、フランス極東学院による古写真で当時唯一原位置を保っていたことが確認できるペディメントである（第9図）。ペディメントの龕内では、偏袒右肩の仏坐像が半跏趺坐で触地印を結ぶ様子が表されている。仏坐像頭部の上には菩提樹の葉が表現され、仏坐像の肩部付近まで葉文が続いている様子を見て取ることができる。この東面仏坐像では該当する仏坐像頭部、胴部、台座部分の石材が現時点では未確認である。

### 西面（第13図）

西面ペディメントは古写真では確認することができなかったが、散乱石材の中から該当部材を発見し、ほぼ完全な形で復元することができた。龕内では半跏趺坐で触地印を結ぶ偏袒右肩の仏坐像が表されているが、東面に見られた菩提樹は表現されていない。顔貌は摩滅と欠けのために判然としない箇所もあるものの、目は切れ長で目尻が上がり、眉はやや弓形である。肉髻は細かな単位での螺髪が表現されているが、頂部に火焰型装飾が載っていたかどうかは定かではない。仏坐像が坐す台座は3層の文様帯で構成されている。上段には花卉文様帯、中段に複弁蓮弁文様帯、下段に蓮蕾状文様帯が表現されており、台座中央部には花卉文様を有する方形の装飾が表現されている。

### 南面（第14図）

南面も古写真には記録されていなかった。仏坐像の脚部は該当する石材を探し当てることができているが、残念ながら胴部以上の石材に関しては今までのところ発見に至っていない。脚部に見られる表現から、おそらく他面と同様に半跏趺坐で触地印を結ぶ仏坐像が表されていたものと推定できる。仏坐像上部には菩提樹の葉が彫りこまれている。台座は蓮弁が上段に、反花が下段に表され、台座中央部には逆三角形を呈した花卉文様を有する装飾が見られる。

### 北面（第15図）

北面も古写真で確認することはできなかったものの、仏坐像の頭部を除きほぼ完全に復元することができた。偏袒右肩の仏坐像が触地印を結び半跏趺坐で台座上に坐している。西面同様、仏坐像の上部には菩提樹の表現は見られない。台座は西面と類似した構成で、上・中・下段の三層の文様帯で構成され、上段には花卉文様帯、中段に複弁蓮弁文様帯、下段には蓮蕾状文様帯が表現されている。西面台座で見られたような布または装飾の表現は見られない。



第11図 中央祠堂躯体部上部仮組風景（南東から）

これら第1ペディメントに関しては現時点では欠損部材も多いため、該当する石材の搜索を続けるとともに、躯体部上部の仮組を引き続きおこなっていく予定である。



第 12 図 中央祠堂第 1 ペディメント東面仮組



第 13 図 中央祠堂第 1 ペディメント西面仮組



第 14 図 中央祠堂第 1 ペディメント南面仮組



第 15 図 中央祠堂第 1 ペディメント北面仮組

## 第2章 歴史的な遺跡と窯跡に関する最新の調査

### 古代刻文とレリーフからみたクメール陶器と金属容器の再考

本章では、2021年9月26日に急逝したカンボジア現地スタッフであり、若手考古学者であったソク・ケオ・ソバナラ氏の過去の論文の中から、彼の研究テーマの一つであったクメール陶器に関する論考を掲載する。本稿は2008年に発表されたもので、日本では未発表論考となる。ソバナラ氏の冥福を祈るとともに、彼に続くカンボジア人若手考古学者の一助になることを願う。

#### 1. はじめに

クメール陶器は、海外の学者や研究者によって長年にわたって研究されてきた。少なくとも、1881年にE.エイモニエがアンコールワット寺院の北東約30kmにあるクーレン山頂のアンロン・トム村に位置するアンロン・トム窯跡を発見して以来と言える。しかし、クメール陶器の研究は、何十年にわたり発展することはなかった。B.P.グロリエがアンコール地方の保存修復官となった際、彼はアンコール地方、特にバンテアイ・クデイ寺院の東やスラ・スランの西、そしてコンボン・トム州のサンポー・プレイ・クックで多くの発掘調査をおこなった。発掘トレンチからは、無釉の土器や緑釉・褐釉の炆器など、多種多様な土器・陶器が大量に出土した。1981年には、9世紀から14世紀までのクメール陶器について、その種類と年代を提示した論文を発表し、シンガポールにおいて展覧会も開催した。グロリエ以降、クメール陶器は他の学者や研究者に注目される存在へとなっていった。しかし、彼らは、基本的にB.P.グロリエの発掘調査の結果に依拠し、その型式、様式、装飾、年代分類にのみ着目していた。1984年には、D.ルーニーはクメール陶器に関する論文を発表した。その後、ロクサーナ・ブラウンが1988年にクメール陶器に関する本(Khmer Wares)を出版している。J.ガイもクメール陶器の研究を始め、1997年にA Reassessment of Khmer Ceramics(クメール陶器の再評価)という論文を著した。L.A.コートは*Asian Traditions in Clay*にクメール陶器に関する論文を発表している。E.ダリス氏は、クメールの陶器に関する新たな報告を2002年にUdayaに発表した。同年、プノンペン王立芸術大学考古学部の学生2名により、窯跡から発見されたクメール陶器の研究がおこなわれた。それは、クーレン山の頂上に位置するアンロン・トムと呼ばれる窯跡から発見された陶器の地域的な研究であった。その1年後、ソク・ケオ・ソバナラは、アンロン・トム窯跡の南西約6km、クーレン山の端にあるソ・サイ窯跡で、陶器生産に関する研究をおこなった。最近では、FOKCIの支援を受けて、古代クメールの刻文や浮き彫りに基づくクメール陶器の類型に関する研究を始めている。

#### 2. プロジェクトの進捗状況

古典語を用いたクメール陶器研究は、筆者の卒業論文「ソ・サイ窯跡の陶器」で初めて試みたものである。現代語との比較からは数語のみ示すことができた。刻文に見られる陶器に関する単語、古代クメール語やサンスクリット語における陶器の呼び名に関する研究を推進している。この研究に関する情報を収集するための調査研究費をFOKCIより受けている。

資金を得た後、2008年2月1日から作業を開始した。現地に赴くための計画や機材も準備した。作業は大きく3つに分けられる。一つ目は、寺院や遺跡での現地調査で、二つ目は、遺物の目録とデータベース、陶器に関する言葉が刻まれた刻文のデータベースを作成することである。そして最後に、陶器片の図面化、調査結果の分析、報告書の作成と出版である。

#### 3. プロジェクト参加者

プロジェクトを進めるにあたり、2名に調査補助を依頼した。一人は2006年に考古学部を卒業した

Phan Makara 氏、もう一人は同年考古学部を卒業した Ly Troleak 氏である。Phan Makara 氏とは遺跡の探査を、Ly Troleak 氏とは、主に刻文や収集した遺物のデータベース作成をおこなった。氏とともに現地に行き、寺院の扉枠に刻まれた刻文を観察、表採、図面作成、そして拓本の採取もおこなった。Ly Troleak 氏は、1ヶ月半にわたり作業をおこなった。特に、陶器や金属製の容器にまつわる言葉で構成された古クメール語やサンスクリット語刻文の探索、それらの刻文をデータベースに登録した。また、遺物採集のため、いくつかの遺跡を訪問した。

#### 4. 作業内容

当プロジェクトを進めるにあたり、以下のような作業を進めた。

##### A. 現地視察

このプロジェクトでは、主に多くの寺院や窯の跡を訪ねることに重点を置いた。筆者らは、複数の州において多くの遺跡へ赴いた。まず、カンボジアの南部、タケオ州を訪問した。アンコール・ボレイ地区では、土器を調査し、主要なタイプの図面を作成した。また、プノム・チソーやネアン・クモアなどの寺院を踏査したが、残念ながら遺跡周辺では遺物を確認することはできなかった。

その他、プレイ・ヴェーン、コンボン・チャム、コンボン・トム、ポーサット、バツタンバン、バンテアイ・ミエン・チェイ、シエムリアップ、プレア・ヴィヒアなどの地方も訪れた。その際は、主に陶器に関する記述を有する刻文がある寺院を対象とした。しかし、これらの遺跡からは、あまり多くの遺物を確認することができなかった。

ところで、クーレン山の南、北、東にある窯跡と思われる場所を訪れた。その結果、クーレン山の北と東に、さらに2つの窯跡を発見した。一つはター・トゥオットまたはトラペアン・プラサートと呼ばれるもので、もう一つは、クーレン山の東にあるチュプ・ロムデンと呼ばれている。

##### B. 遺物収集

寺院や窯跡を訪れた際、地下からの出土品ではなく地表面から採集された遺物もある。これらの遺物は、地名、寺院名、州名、郡名、コミューン名、村名、収集日、量など、出土地や情報を明記した上で、洗浄、図面化し、データベースに登録した。これらの遺物は現在、シエムリアップの事務所に保管されており、2つのグループに分けてリスト化されている。一つは、筆者らが最近訪問した遺跡から収集した陶器片を指すグループである。もう一つのグループは、2007年に Ea Darith 氏がアンコールからピマーイ寺院までの古道のうちウダー・ミエン・チェイ州に位置する複数の遺跡から採取した陶器片である。今回の調査で収集した陶器片は全部で270点にのぼる。また、ダリス氏が収集した陶器は162点である。これら2つの陶器群をリスト化し、Inv.No.1～No.425まで番号をつけた。なお、破片の中には接合可能な2点以上の破片（同一個体）が含まれているものもあり、その場合は1つの番号を付与している。

出土品は、

###### a- クク・ヤイ・ハム (Kuk Yay Ham) :

コンボン・チャム州にある寺院遺跡で、アンコール時代のジャヤヴァルマン7世の治世（12世紀末から13世紀初め頃）に建立されたものである。この遺跡からは12点の陶器片が出土した。これらの陶片は1番から12番までの番号が与えられた。

###### b- プレア・テアット・スレイ (Prah Theat Srei) :

コンボン・チャム州にある寺院遺跡で、アンコール時代に建立された。この遺跡からは4点の破片が出土しており、遺物番号は13番から16番である。

**c- プレア・テアット・ブロ (Prah Theat Bros) :**

コンボン・チャム州にある寺院遺跡で、アンコール時代に比定される。17番から26番までの10点の破片が出土している。

**d- プノム・バナナ (Phnom Banan) :**

バタンバン州にある寺院遺跡で、少なくとも11世紀から13世紀にかけてのものである。27番から42番までの16点を採集している。

**e- 72号遺跡 (Site No 72) :**

バンテアイ・ミエン・チェイ州プノン・スロク郡にあり、アンコールからスト・コック・トムへの古道沿いにある場所である。43番から61番までの19点が収集されている。

**f- ター・トゥオット (Ta Tuot B号窯?) :**

シムリアップ州、クーレン山の北、ター・トゥオット村にある遺跡。トラペアン・プラサートという寺院の堀の南側のダイク上に位置し、窯跡であることは明らかではないが、小さなマウンド状で、多くの陶器片を確認できる。62番から95番までの34個の陶器片が収集された。

**g- ター・トゥオット (Ta Tuot A号窯?) :**

クーレン山の北、ター・トゥオット村にある遺跡。小川沿いの台地と思われる平坦な場所に陶器片が残されている。96番から197番までの陶器が出土しており、その数は112点にのぼる。

**h- ヴィール・コック・トレア (Veal Kok Treas) :**

シムリアップ州104番村のベン・メリア寺院の東約15kmに位置する窯跡である。多くの無釉や褐釉の陶器片や窯体を確認することができるマウンドである。198番から213番までの16個が収集されている。

**i- チュップ・ロムデン (Chub Romdeng) :**

シムリアップ州103番村、ベン・メリア寺院の東約15kmに位置する窯跡である。無釉や褐釉の陶器片、窯体などを確認することができるマウンドである。214番から235番までの22点が収集された。

**j- ヴィール・トラッ・チュー (Veal Trac Chour) :**

約9基のマウンドからなる窯跡群である。シムリアップ州104番村、ベン・メリア寺院の東約15kmに位置する。この地域には、無釉や褐釉の陶器片、窯体などを多く確認することができる。236番から267番までの32点が収集されている。

**k- コック・クジェイ (Kok Khjeay) :**

Ea Darith氏がウドー・ミエン・チェイ州にある窯跡と確認した場所である。陶器の破片は、アンコールからピーマイ寺院までの古道沿いの調査時に採集している。268番から286番までの19点の陶器片が収集されている。

**l- コック・トレア (Kok Treas) :**

ウドー・ミエン・チェイ州にある窯跡で、ダリス氏が確認した場所である。陶片は、アンコールからピーマイ寺院までの王道調査時に採集されたものである。287番から302番までの16点の陶器片が収集された。

**m- トロン・アコン (Thlong Akoang) :**

ウドー・ミエン・チェイ州にある窯跡で、ダリス氏が確認した場所である。アンコールからピーマイ寺院までの王道調査時に採集している。陶器の破片は23点で、303番から325番までの陶器片が収集された。

**n- コック・チェン・ミエン (Kok Ceng Mieng) :**

ダリス氏がウドー・ミエン・チェイ州にある窯跡と認識していた場所である。陶片は、アンコールからピーマイ寺院までの王道調査時に収集された。326番から352番までの27点の陶器片である。

**o- コック・ヤイ・デン (Kok Yay Degn) :**

ウドー・ミエン・チェイ州にある、ダリス氏が確認した窯跡である。陶片は、アンコールからピーマイ寺院までの王道調査時に収集されている。353 番から 407 番までの 55 点である。

#### **p- スロク・クドム (Thlok Khdom) :**

ウドー・ミエン・チェイ州にある窯跡で、ダリス氏が確認した場所である。陶片は、アンコールからピーマイ寺院までの王道沿いの調査時に採集されたものである。408 番から 425 番までの 18 点の陶器片が収集された。

### **C. 遺物目録の作成**

シムリアップでは、主に収集した遺物のデータベース化をおこなっている。すべての遺物を丁寧に水洗いし、日光で少し乾かした後に、室内で再び乾燥させた。その後、陶器 1 点 1 点に番号を与えた。これらの陶器をリスト化し、Excel (目録) と FileMaker (データベース) に記録 (遺跡名のみ分離) した。Excel のページには、目録番号、袋番号、遺跡名、州、層 (今回の場合は表面採集)、採集日、器形、産地 (クメール産、中国産など)、種類 (土器、陶器)、部位 (口縁、首、肩など)、胎土色 (灰色、赤色、薄灰色など)、釉 (無釉、灰色、褐色など)、寸法 (幅、高さ、厚さ)、重量、装飾、量を記載している。その他、詳細情報はファイルメーカーファイル (データベース) で表示できるようにし、エクセルファイルで示されたすべての遺物の文字情報を提供するものである。通常、遺物の形状は、破片が特定できる場合はクメール語を、特定できない場合はクエスチョンマーク (?) また、未同定の遺物には Unknown という単語を使用する。Excel のリストやデータベースのページで使われているクメール語は、kumrop (蓋)、can=cân (碗)、khuoc (瓶)、kanlo (甕)、kandin (小壺)、kanthor (広口壺)、kundi (水注)、kodth (壺)、tanlap (合子)、chnang=chnān (調理鍋)、ka-am (水甕)、ung=uñ (大壺)、vang=vān (鉢) である。胎土の色の欄には、L.Gray (薄灰色)、L.Red (薄赤色)、L.Yellow (薄黄色)、D.Gray (濃灰色)、D.Red (濃赤色)、R.Grey (赤灰色) など省略した言葉を使用した。データベースのページでは、これらの情報が個別に表示される。

#### **- アクセス情報 :**

異なる 11 の項目に分けられる。目録の項目は各陶器片の収蔵番号を表示する。旧番号の項は、かつて別の収蔵番号や図面番号が付与されていた遺物番号を表示するものである。この欄のうち、一部の遺物に関しては実測図を意味する D の文字で個別の番号を付与している。袋番号の欄は、遺物が収められている収蔵袋の番号を示している。同じ遺跡の同じ年代の遺物は、同じ袋の番号に収納した。箱番号の項目には、分析後、データベースに登録された遺物がどこに保管されているかを示している。遺物名の項には、クメール語の名称に従って、陶器の名称や形状が表示される。kandin (小壺)、kanthor (広口壺)、kundi (水注)、kodth (壺)、tanlap (合子)、chnang=chnān (調理鍋)、ka-am (水甕)、ung=uñ (大壺)、vang=vān (鉢) などがある。一部の未同定片は Unknown で表現する。材質欄では、遺物がどのような材料で作られているかを示す。種類欄は、土器か炆器かなど、遺物の種類を示す。原産地欄は、クメールや中国など、どこで生産され、また輸入されたかを示している。年代欄はその遺物がどの時代のものであるかを示し、日付欄では、出土した日を示している。現在の保管場所欄には、現在、どのような場所に保管されているかが表示される。

#### **- 収集情報 :**

この部分は、主に遺物が収集された場所を示している。遺跡位置欄は、遺跡の名称を確認するための欄である。E と N のボックスは、GPS の地点を示している。村、コミューン、地区、州、国の欄は、遺跡の位置する場所の名称を示す。収集日欄は、遺物の収集日 (月、日、年) を示す。



#### - 遺物の特徴：

遺物の名称欄と同様に、遺物の名称や形状、その後にクメール語の名称が続く。形状の項目は、円形、円筒形、円錐形など、遺物の形状を示す。現在の状態を示す項目は、遺物がどの程度の大きさで残存しているかを示す（完形、半分または小さな断片など）。部位の項目では、遺物のどの部分にあたるかを示している（口縁、頸部、胴部、底部など）。内面色と外面色の項目には、遺物の内面と外面の色を示している。

#### - 寸法：

ミリメートル単位で計測された遺物の長さ、幅、高さ、厚み、直径を表示。重さの欄は、グラム単位で計測された重さを示す。量の項目では、遺物の点数や破片の数を表す。色調の項目では、遺物の最も主要な色を示している。例えば、1つの破片が3色、10%の濃赤色、10%の濃灰色、80%の灰色を有する場合、主要な色は灰色に分類される。

#### - 製作技法：

陶器の製造方法について記入する項目。成形法では、陶工がどのような方法で成形したか（あて具や叩き板を使用した手びねり、ろくろや回転台、粘土紐積み上げ、型作りなど）について記述する。材料欄は、粘土や青銅など、どのような材料が使用されているかを示している。材料の色調欄は、材料の色を示している。砂や穀殻など、粘土の混和材も表示する。焼成方法欄は、窯での焼成か、窯以外で焼くかを表す。温度欄は、陶器焼成時の推定燃焼温度が分かれば記載する。

#### - 装飾：

陶器に施された装飾について説明する。装飾欄には、無文、稜線や切込み、点線、型押し、刻印などの装飾を示す。スリップの項には、焼成後に施されるスリップの有無と色を記載する。絵付けの項は、黒や赤など、色彩で絵付けされた場合を表す。釉薬の項は、釉薬の有無を表す。自然釉の項では、焼成後に現れる自然釉の有無を表す。刻印欄は、陶器に施された刻印を示すもので、陶器の底部や胴部に見られることがある。その他のモチーフの欄は、陶器につけられた痕跡のうち、磨きの痕跡や粘土の巻き上げの痕跡など、簡単な情報を示す。

#### - 一般情報：

収集された遺物に関する情報や、遺跡やその状況に関する一般的な情報を提供する欄。

#### - 編集者：

このデータベースを作成し、記録したのが誰であることを示す。

#### - 記録日：

このデータベース記録した日付を示す。

直近で採集した遺物は270点である。そして、ダリス氏がかつて収集したものは162点であった。これらの破片は、1番から425番までの番号を与えている。同じ製品だが2～3破片に割れているものがある場合は、同一の収蔵番号を与えている。

### D. 遺物の図面化

最後に、これらの遺物の中から数点を抽出し実測図を作成した。今回、これらの遺跡から収集された遺物には、完形のものはない。しかし、抽出した実測図には、大きく分けて三つの重要な部位がある。ひとつは口縁部から頸部、胴部を含む破片、胴部を含む底部破片、そしてもうひとつは、胴部の一部に何らかの装飾を施したものである。しかし、これらの図面は、元の形や大きさを提供することができないうえ、出版物の図版に利用できるものも少ない可能性もある。しかし、これらの陶器を典型的な形式に分類するのに有効である。

これらの陶器片の一部を、系統的に実測図を作成した。図面の原寸は1/1、つまり図面上の1センチメー

トルが対象の遺物の1センチメートルに相当する。図面は2パーツに分けて表現される。右側は、遺物本体の半分の形状とその厚みを示し、左側には、外面や装飾など、もう半分の形状を表す。これらの破片を方眼紙上に図面化したのち、イラストレーターのソフトで再度トレースをおこなった。同じ遺跡から出土した図面は、番号の前にD (Drawing の意) を付けた識別番号で同じグループに並べた (例えば、D1, D2, D3... など)。筆者らは210点の陶器片の実測図を作成した。これらの図面データは、データベース内には挿入していない。

## E. 刻文目録・データベース

もう一つの作業は、陶器に関する言葉を含む刻文のデータベース化である。陶器に関する言葉を含む刻文は約100件見つかり、データベースに登録した。主に、G. セデス氏による (*Inscription du Cambodge*, BEFEO) など古くに出版された文献や、クメールの刻文について書かれた他の研究者の文献から抽出した。

このデータベースは、陶器に関連する古代クメール語やサンスクリット語を検索する他の研究者に対し有用な方法を提供することが可能である。このページでは、各刻文の出土地を示すために、以下のような特別な情報を掲載した。

### - アクセス情報:

この部分には、G. セデス氏が付けた刻文の目録番号 (例: K.262)、Ecole Française d'Extreme-Orient (EFEO) や Depot Archeologique d'Angkor (DAA) が付けた番号、Musee Albert Sarraut (現プノンペン国立博物館) がD文字で示した番号 (例: K.158=D14) などがある。刻文面とは、刻文に刻まれている面を指し、一つの刻文には一つの面しかないことがある。そのため、刻文面の欄には、片面という単語で表示した。一方、一枚岩に書かれた刻文には、2面、3面、4面を持つものがあり、G. セデス氏はこれを Faces 1, 2, 3 and 4あるいはA, B, C, Dと分類している。その他、寺院の扉枠に刻まれた刻文もあり、この場合、南扉枠、北扉枠と記載した。発見者欄は、その刻文を最初に発見した学者や研究者のことを指す。年代欄は、その刻文が発見された年を表す。言語欄は、刻文に使用された言語、クメール語、サンスクリット語などを意味する。行数欄は、刻文の行数または文の数を表している。

### - 位置情報:

この部分は、主に刻文が発見された場所と、現在の保管場所を示す。寺院名、寺院の目録番号、GPSポイント (ただし、今回の作業では、データベースに登録したすべての刻文の各位置情報を取得するのに十分な時間がなかったため、これらの欄は空白になっている)、村名、コミューン、地区、州、国、現在の保管場所などが示される。刻文の中には、保管場所がわからないものも存在する。

### - 歴史的情報:

この部分は、刻文が属する時代 (プレ・アンコール、アンコール、ポスト・アンコール)、年代 (正確な年またはおおよその世紀)、様式 (これはプノン・ダ、サンボール・プレイ・クックなどのクメール美術様式に従う)、建立者とは、刻文を命令または書いた人 (例: 王の命令または高官)、治世はどの王の治世下で書かれたかを示す。刻文定義欄には、刻文の主な意味を簡潔に示している。

### - 陶器の単語表示:

各刻文に見られる、地名、人名、人・寺院に贈られた物など、陶器や金属製の容器にまつわる言葉を表示した。例えば、kandin 116:14のように表示される場合、kandinという単語は文献の116ページ、刻文の原文の14行目に掲載されたことを意味する。

### - 文献:

この項目には、刻文の旧版と新版の情報を提供する。例えば、K.257はE. エイモニエが発見し、彼の著書 *Le Cambodge, Tome II* の877ページに掲載され、G. セデスが *Inscription du Cambodge, Tome IV* の

140-150 ページで再度詳細に研究している。

**- 編集者：**

このデータベースのページを編集し、ページ内の情報を入力した編集者について記録する。

**- 編集日：**

ここでは、このデータベースに情報を入力した年、月、日を示す。

**- 画像欄：**

このページには3つの画像欄があり、上の欄は、刻文の原文の画像を入れられる。中段には、刻文が設けられた寺院の写真を表示する。そして、一番下の欄は、刻文が発見された寺院や場所の位置を示す地図を挿入する。使用した地図は、文化芸術省とフランス極東学院の協力のもとで作成された最新のデータである。

## F. 刻文の拓本

もう一つの目標は、寺院の石碑や扉枠に書かれた刻文の拓本を採取することであつた。これらの刻文はデータベースのページで使用される予定である。拓本採取には、薄葉紙と墨を使用した。しかし、刻文の中にはすでに撤去または持ち出されたものもあつた。また寺院の扉枠に書かれた刻文は、寺院の上部や屋根から落ちてきた砂岩で覆われたものもあり、この場合拓本の採取は不可能であつた。そのため、原物から拓本を採取できた刻文はごくわずかである。そこで、陶器に関する刻文データベースは、G. セデス氏から研究者が作成した資料を主に使用した。

## G. 資料収集

王立芸術大学図書館、プノンペン国立博物館図書室、EFEO 図書館、クメール研究センター図書館など、プノンペンとシェムリアップにある図書館から資料を収集した。収集した書籍や資料は、主に古代クメールの刻文、レリーフに関するクメール美術や彫刻、陶器などに関連するものであつた。重要な書籍としては、G. セデス氏が出版した *Inscription du Cambodge* の第1巻から第7巻があげられる。その他、BEFEO (*Bulletin de l'Ecole Française d'Extreme-Orient*) に掲載された古代クメールの刻文に関するいくつかの論文、また、P. サラボス氏が出版した *Nouvelles Inscriptions du Cambodge* (tome 1 and 2) という本も当研究に非常に有用であつた。このほかにも、クメールの刻文や陶器に関連する論文や書籍も、当研究・出版のために収集した。

## 5. 窯跡の発見

今回の調査で、古代の陶器生産地と思われる場所を2カ所訪問した。これらは窯跡とみなすことができる。最初の遺跡は、シェムリアップ州スヴァイ・ルー郡カントウオットコミューンのター・トゥオットという村で、クーレン山の北東約5kmに位置する。この遺跡は2つの地点に分かれている。一つはター・トゥオット A 号窯 (GPS 座標：E=0409887, N=1508464) と呼ばれ、広い台地の上であり、土器、炆器、無釉、灰釉など多くの破片が確認されている。しかし、周辺には窯体の痕跡はほとんど見られなかった。

もう一カ所はター・トゥオット B 号窯と呼ばれ、A 号窯の南東約200mに位置する。トラペアン・プラサート寺院の環濠の南側のダイクにある (GPS 座標：E=0410066, N=1508322)。マウンドは1基のみで、焼土塊または窯体の一部を含むマウンドと思われる遺構を確認した。また、褐釉陶器片を中心に、土器、灰釉、中国白磁の破片が出土している。

第二の遺跡は、バンテアイ・スレイ郡ベン・メリア・コミューンにあり、ベン・メリア寺院の東方約15kmに位置する。ここは3つの地区に分かれている。一つは、ベン・メリア寺院からコンボン・スヴァ

イの大プレア・カーンに至る古道の南方 300m、103 番村（GPS ポイント：E=0432142、N=1484903）にあるチュップ・ロムデン窯と呼ばれるものである。古道に向かって北向きの平坦な場所に 1 基のみマウンドが築かれている。このマウンドは、ラテライトブロックと粘土で築かれたことが明らかである。窯跡の壁面の様子から、窯の規模は、長さ 10.5m ～ 11m、幅 1.5m ～ 1.6m 程度と推定された。この窯では、主に褐釉陶器と無釉陶器が生産されていた。ここでは、稜線や陰刻、幾何学的な線があらわされた大型の壺や鉢が作られていたとみられる。もう一つは、チュップ・ロムデン窯の東方約 500m の 104 番村（GPS 座標：E=0433173、N=1484076）にあるヴィール・コック・トレアと呼ばれる場所である。平坦な場所に築かれたマウンドのみからなり、古道に向かってほぼ北を向いているが、その規模は不明である。ここでも褐釉陶器が大量に生産されたとみられるが、無釉のものはほとんど生産されなかったようである。もう一つの場所は、ヴィール・コック・トレア窯の南方約 500m のところにあるヴィール・トラッ・チューという場所である。この地域は 9 基のマウンドからなり、そのうち 5 基は南北約 100m の長いダイク上に、他の 4 基はダイクの南東に位置していたものと思われる。残念ながら、ダイク上の 5 基のマウンドは、すでに村人によって土地境界線として平坦化され、破壊されていた。この地域からは、無釉や褐釉陶器が出土し、大甕や鉢、水注などが中心であった。これらには稜線や陰刻、幾何学模様などさまざまな文様が施されている。

## 6. 民族学的観察

また、コンボン・トム州、バンテアイ・ミエン・チェイ州、コンボン・スプー州に住む村人や少数民族への聞き取り調査も行った。しかし、当該地域の村人たちは、同じクメール語の単語を用いて異なる種類の器を指していた。また陶器に関する単語の意味が明確でないものもあった。また一部の少数民族はクメール社会に非常に密接に関わっており、陶器に関する有用な情報はあまり入手することはできなかった。そこで、パゴダで暮らす高齢者に、Kandin, Kralo, Khuoch, Kodth, Ka-am, Vang など陶器や金属製容器の形状について聞き取り調査をおこなった。刻文に見られるような古代の言葉と比較するために、現代の人々が使用している生きた言葉について、さらに調査を進める予定である。

## 7. 報告書の執筆

この調査を通じて、クメール語やサンスクリット語に基づく刻文、寺院の壁面やリントル、ペディメントのレリーフ、そしてクメールの陶器や金属製の容器に関する研究に関わる情報を多く得ることができた。本稿の主要なポイントは、形や用語に基づくクメール陶器類型論の整理と、刻文に見られるいくつかの証拠に基づく窯跡の把握にある。古代刻文から、9 世紀から 14 世紀にかけて、クメール語やサンスクリット語など、陶器や金属製の容器に関する 40 以上の単語が常用されていることが判明した。これらの言葉は、陶器や金属製の容器であることはわかるが、残念ながら、そのかたちを正確に特定することはできない。これらの言葉の中には、現在に至るまでクメール人が使用し続けているものがあるが、わずかしきその形状を知ることができないのである。しかし、今後は、他言語であるモン語、チャム語、他の少数民族の言語との比較により、それぞれの言葉の本当の姿を明らかにするための研究を進めていく予定である。

一方、第二の目標は、窯跡の研究である。刻文には、窯跡や生産地、あるいは少なくとも売り場や市場であると考えられるいくつかの単語や地名を確認することができる。例えば、ワット・バセット寺院の扉枠に刻まれた 11 世紀の刻文 K.205 は、品物と使用人の寄贈について述べている。その中には、10 世紀の別の刻文 K.181 で紹介されたヴィラプラという言葉で表現されたものもあり、特に陶器が多い。まず、このヴィラプラは、ベン・メリアの東、あるいはベン・メリア寺院とサンボール・プレイ・クックの間、コンボン・スヴァイのプレア・カーンの北あたりに存在した都市の名であろう。次に、刻文 K.205 に見られるヴィラプラは、特殊な形状の陶器を生産していた場所、あるいは窯跡である可能性がある。最近、ベン・

メリア寺院の東側、寺院からプラカーン・カーン・コンボン・スヴァイへの古道沿いで、新たな窯跡がいくつか発見されている。これらの遺跡と、刻文から得られる情報と比較しながら、さらに調査を進めることができるだろう。主に、10世紀当時のヴィラプラがどこにあったのか、ヴィラプラの領土はどの程度だったのかなどを調べる必要がある。

## 8. おわりに

このプロジェクトは、クメールの刻文をもとにクメールの陶器や金属器を理解する上で、非常に重要な調査である。しかし、「刻文とレリーフから見たクメール陶器・金属器の研究」の論考を補強するために、さらなる情報や証拠が非常に有益である。なお、陶器の生産地から他地域への輸送に関する研究のため、いくつかの陶片を収集したが、これらの陶片は、番号付けをおこない、他の学者や研究者が容易に検索・研究できるようにデータベースに登録をおこなっている。

遺跡名	土器	炆器	無釉	施釉	
				灰釉	褐釉
クック・ヤイ・ハム	3	9	7	0	5
プレア・テアット・スレイ	4	0	4	0	0
プレア・テアット・プロ	5	5	9	0	1
プノム・バナシ	7	9	7	1	8
72号遺跡	0	19	6	5	8
ター・トゥオット (B号窯?)	1	35	5	6+1white	23
ター・トゥオット (A号窯?)	36	66	62	39	1 white
ヴィール・コック・トレア	0	16	4	0	12
チュップ・ロムデン	6	20	7	0	19
ヴィール・トラッ・チュー	0	32	5	2	25
コック・クジェイ (窯跡か)	3	17	5	3+1white	11
コック・トレア (窯跡か)	3	13	5	2	9
トロン・アコン (窯跡か)	0	24	4	7	13
コック・チェン・ミエン (窯跡か)	1	26	13	5	9
コック・ヤイ・デン (窯跡か)	5	53	11	11+1white	35
スロック・クドム	1	18	6	4	9

表1 遺跡別遺物出土点数

COLLECTED CERAMIC FRAGMENT INVENTORY		List	Inventory No 207
<b>Accession Information</b>			
Inventory No	207	Old No	
Object Name	Ung	Material Type	Clay
Period	Angkor	Material Quality	Stoneware
Current Storage	Nara Institute Office		
		Bag Number	8
		Box No	
		Origin	Khmer
		Date	Unknown
<b>Collection Information</b>			
Site/Location	Veal Kok Treas		E 0433173
Village Name	104 village	Commune	Beng Mealea
District	Banteay Srey	Province	Siem Reap
Country	Cambodia	Collection Date	4/9/2008
		N	1484076
<b>Object Character</b>			
Object Type	Ung	Shape	Round
Current Condition	Small Piece	Portion	Shoulder
Internal Color	Gray	External Color	Gray
<b>Dimension (mm/g)</b>			
Length	180	Width	109
Thickness	11.5	Diameter	
Amount of Piece	1	Weight	374
		Color	Gray
<b>Making Technic</b>			
Forming Technic	Turning Table	Material	Clay
Material Color	Gray	Temper	Sand
Firing Technic	Inside kiln	Tempera.	Around 900c-1100c
<b>Decoration</b>			
Design	Ridged circle line	Slip	None
Painting	None	Glaze	Brown
Burnish	None	Mark	None
Other motifs	Trace of Polishing on inner wall,ear		
<b>General Information</b>			
<p>This fragment was taken from a mound which shwon as a kiln located in village No 104. There is only one mound around this area. There are mainly only stoneware large jars applied with brown glaze.</p>			
Edited By	Sok Keo Sovannara		Record Date
			4/9/2008

Fig.1 採集陶器データベースの例

INSCRIPTION DATABASE FOR KHMER CERAMIC WORDS		List
<b>ACCESSION INFORMATION</b>		
Inv. No	K.262	Other No EFEO-667
Found by	Aymonier, E.	Inscription Face Door Frame N
Year	1901	Language Khmer
		Lines 35
<b>LOCATION INFORMATION</b>		
Temple Name	Vat Prah Einkosei	Temple No
North axis		East axis
Village Name	Trang	Commune Name
District Name	Siem Reap	Province Name
Country Name	Cambodia	Current Location
		On north door frame of central tower
<b>HISTORICAL INFORMATION</b>		
Period	Angkor	Date
		968 A.D
Style	Banteay Srei	Founder
		Unknown
Reign	Jayavarman V	
Text Definition	It is a Khmer text of 35 line saying about the construction of Dvijendrapura by an order of a king un-named, in 890 saka (968 A.D). It also say about the donation of objects and sculptures to the temple of Dvijendrapura, and so on.	
<b>CERAMIC WORD INDICATION</b>		
<p>patula-110:9, khlas-110:9, vausdi-110:9, vardhani-110:9, nu-110:9, bhajana-110:10, bhaja-110:10, kamandalu-110:10, koca-110:10, kalaca-110:10, arghya-110:10, sarava-110:10, khal-110:10, padya-110:11, tanlap-110:11, patigraha-110:11, kadaha-110:13, svok110:13, nong cina110:15...</p>		
<b>PUBLICATION</b>		
<p>Aymonier, <i>Cambodge</i>, II, 1901, p404 and next  L. De Lajonquiere, <i>Inventaire</i>, III, p230.  G. Coedes, <i>Inscription du Cambodge</i>, IV, 1952, Paris, p108-139.</p>		
Edited By	SOK KEO SOVANNARA	Date of Edition
		2008/01/18

K.262

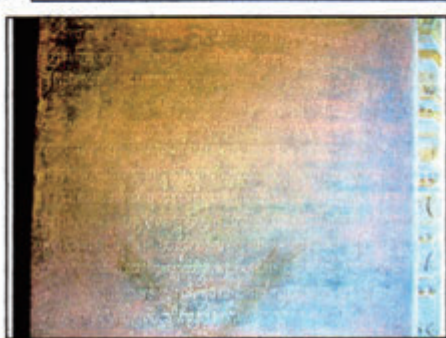






Fig.2 刻文に見られる陶器用語データベースの例



Fig.3 ター・トゥオット B 号窯地表面遺物分布状況



Fig.4 チュップ・ロムデン窯マウンド





Fig.5 タ・ケオ州ネアン・クモア寺院における拓本採取の様子



Fig.6 コンボン・チャム州クック・ヤイ・ハム寺院における遺物採集の様子



Fig.7 バンテアイ・ミエン・チェイ州内アンコール～ピーマイ間王道沿いでの GPS 測量



Fig.8 シェムリアップ州ター・トゥオット村に位置する窯跡踏査



Fig.9 コンボン・チャム州クック・ヤイ・ハム寺院



Fig.10 コンボン・チャム州クック・ヤイ・ハム寺院周辺表面採集遺物



Fig.11 バッタバン州ワット・バセット寺院



Fig.12 バッタバン州ワット・バセット寺院扉内面の刻文



Fig.13 バッタバン州プノム・バナナ寺院



Fig.14 バッタバン州プノム・バナナ寺院近郊出土遺物



Fig.15 バンテアイ・ミエン・チェイ州内アンコール～ピーマイ間王道沿い 72 号遺跡での遺物分布状況



Fig.16 シェムリアップ州チュップ・ロムデン窯マウンド



Fig.17 シェムリアップ州ヴィール・トラ・チュー窯マウンドの破壊



Fig.18 シェムリアップ州ヴィール・コック・トレア窯マウンド

Chub Rodeng Kiin Site

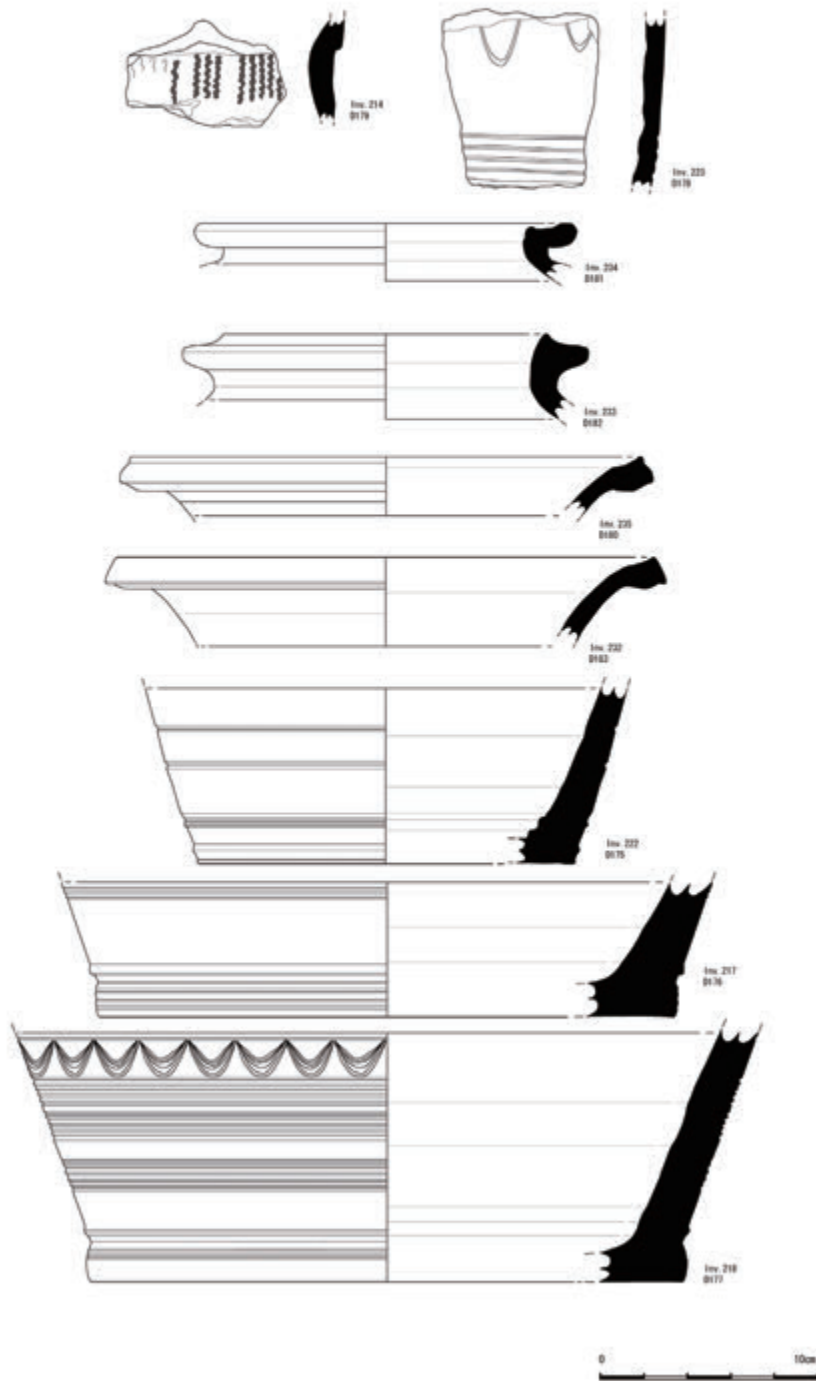


Fig.19 チュップ・ロムデン窯出土遺物



Kuk Yay Ham Temple Site

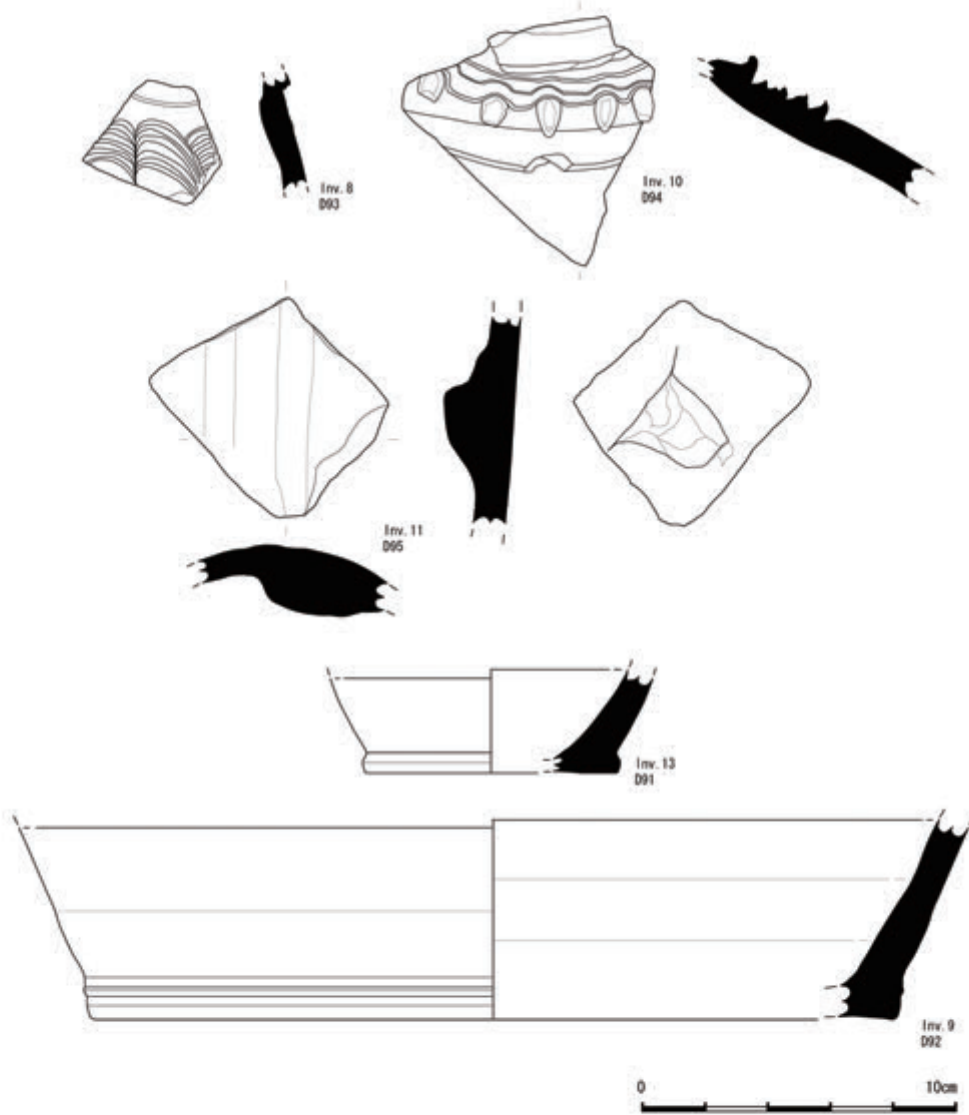


Fig.20 クック・ヤイ・ハム窯出土遺物

Phnom Banan Temple Site and Point 72 Site

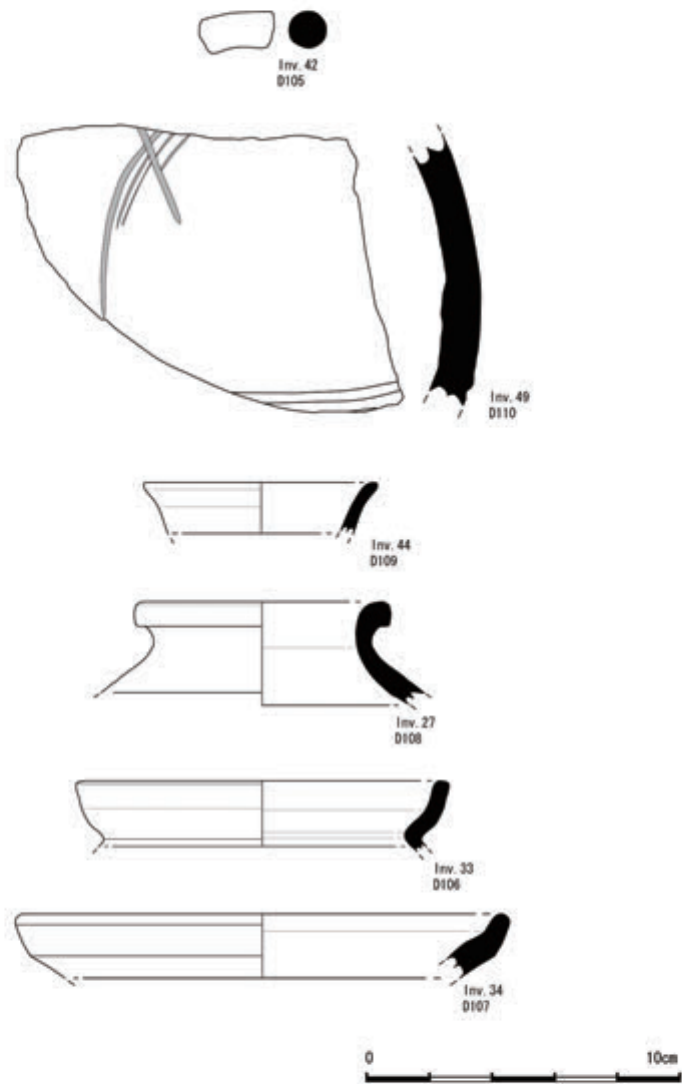


Fig.21 プノム・バナナ窠・72号遺跡出土遺物

Prah Theat Srei Temple Site



Fig.22 プレア・テアット・スレイ遺跡出土遺物

Prah Theat Bros Temple Site

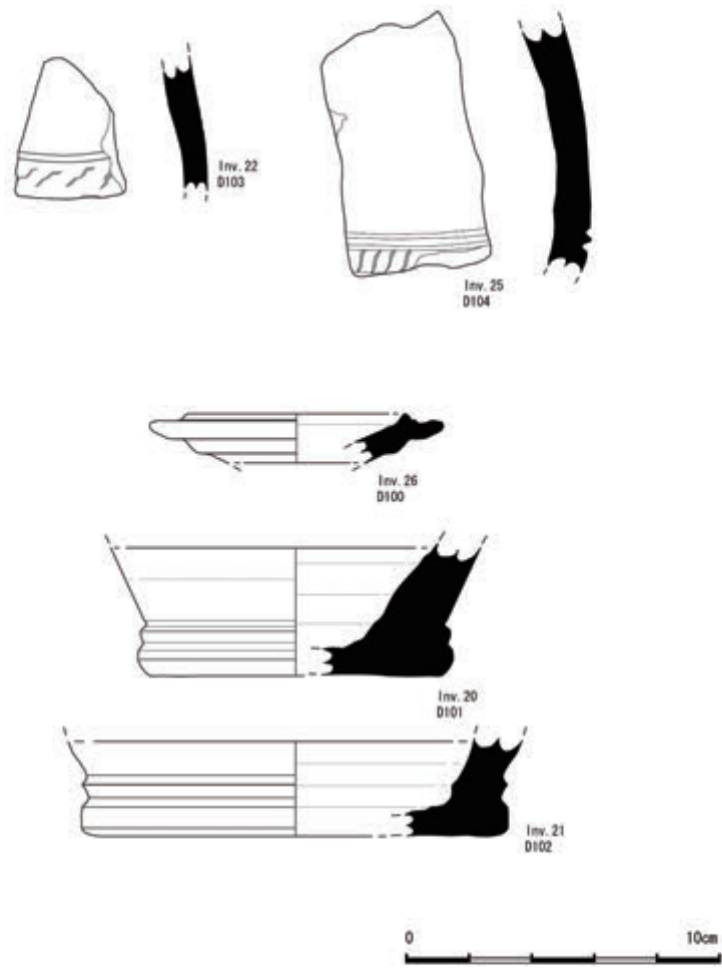


Fig.23 プレア・テアット・ブロ遺跡出土遺物

Ta Tuot Kiln A Site

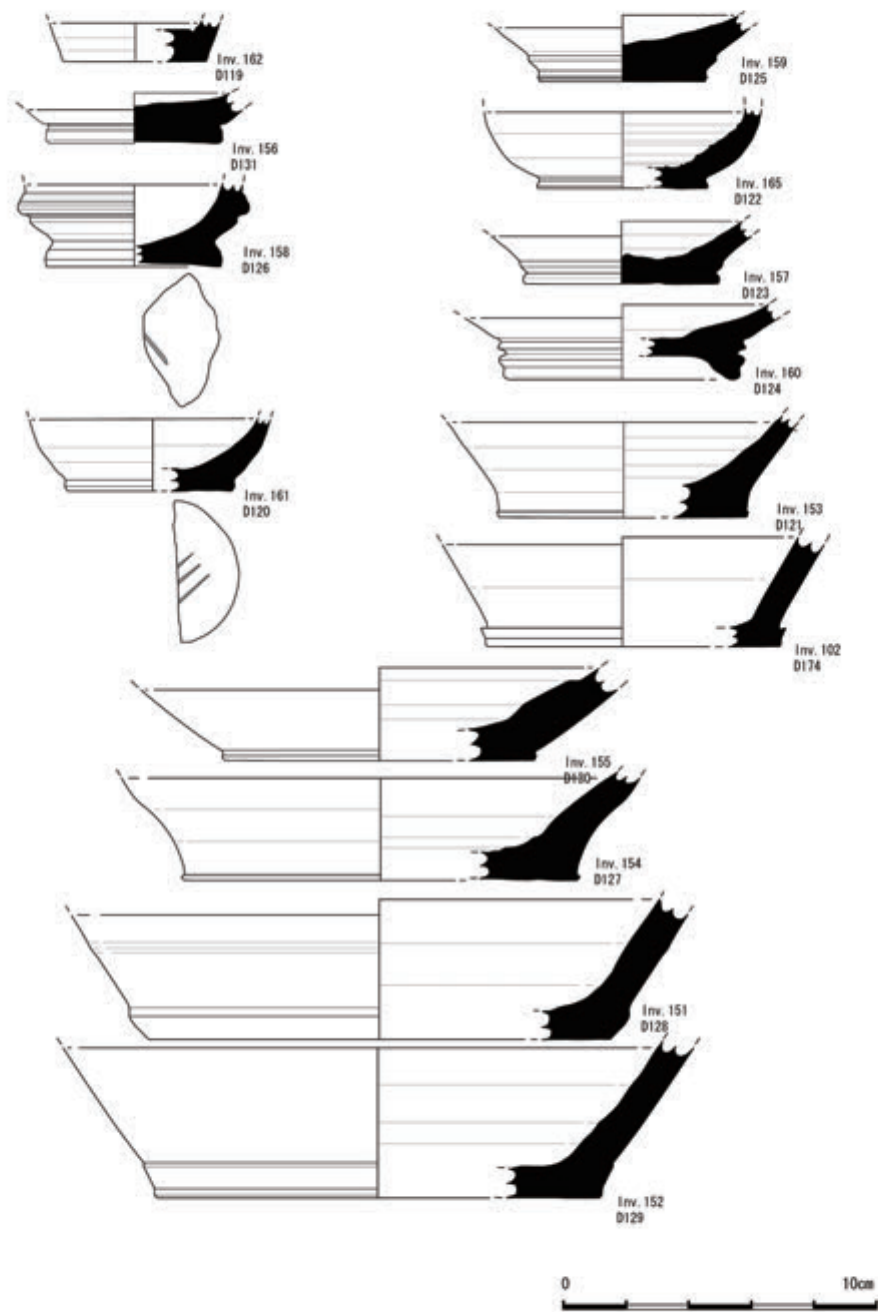


Fig.24 ター・トゥオット A 号窯出土遺物 1

Ta Tuot Kiln A Site

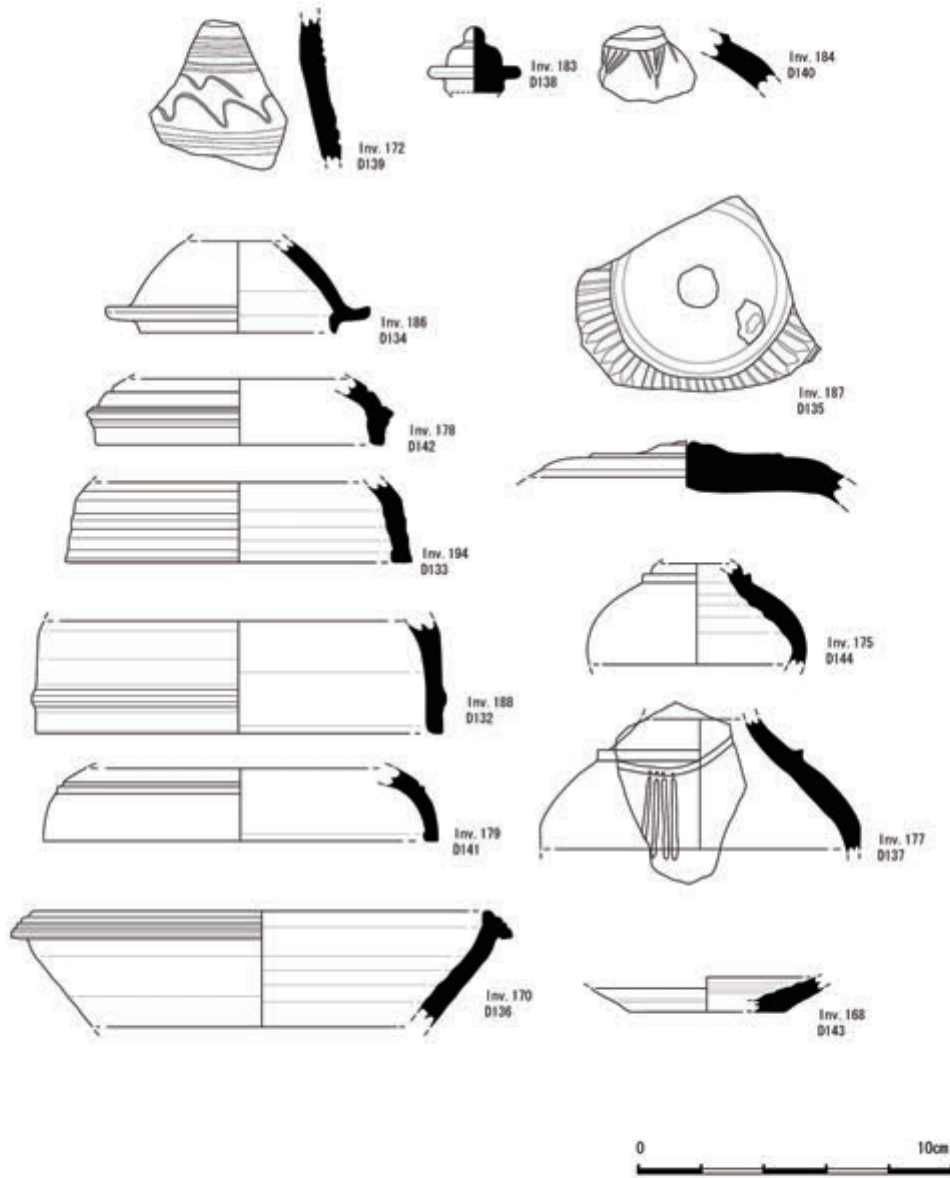


Fig.25 ター・トゥオット A 号窯出土遺物 2

Ta Tuot Kiln A Site

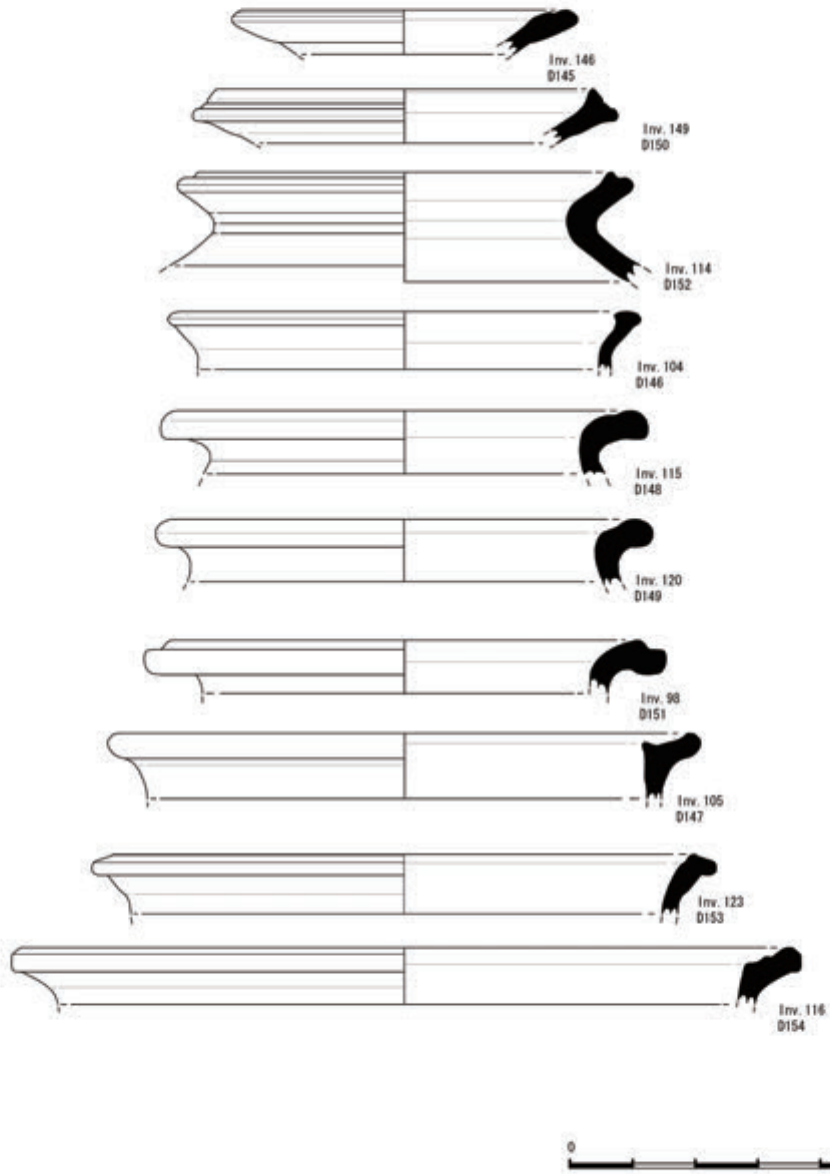


Fig.26 ター・トゥオット A 号窯出土遺物 3

Ta Tuot Kiln A Site

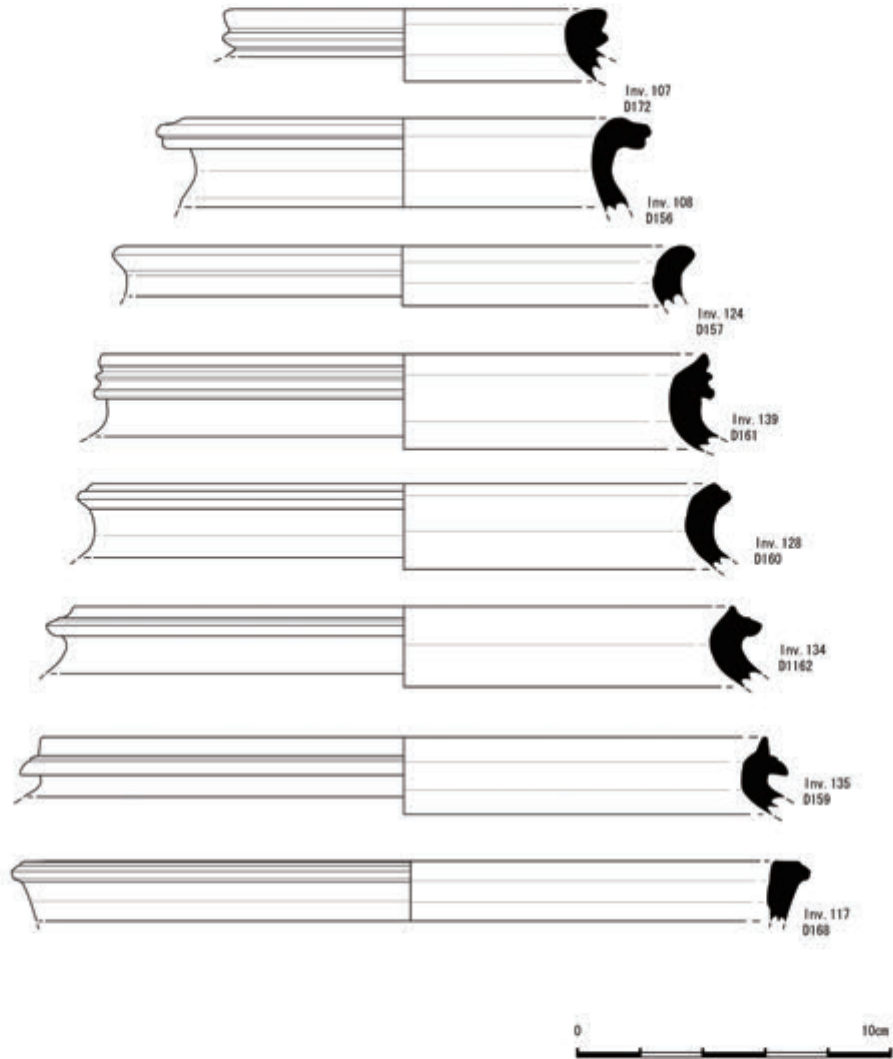


Fig.27 ター・トゥオット A 号窯出土遺物 4



Ta Tuot Kiln A Site

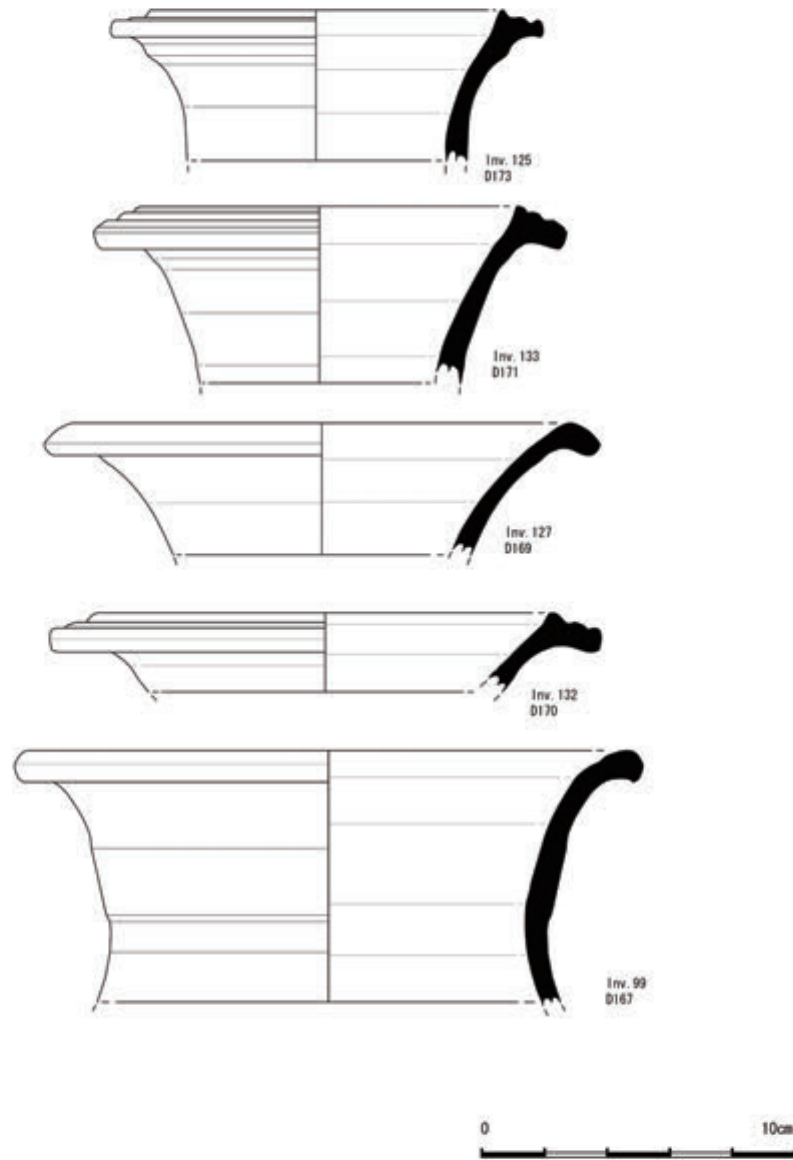


Fig.28 ター・トゥオット A 号窯出土遺物 5

Ta Tuot Ki In B Site

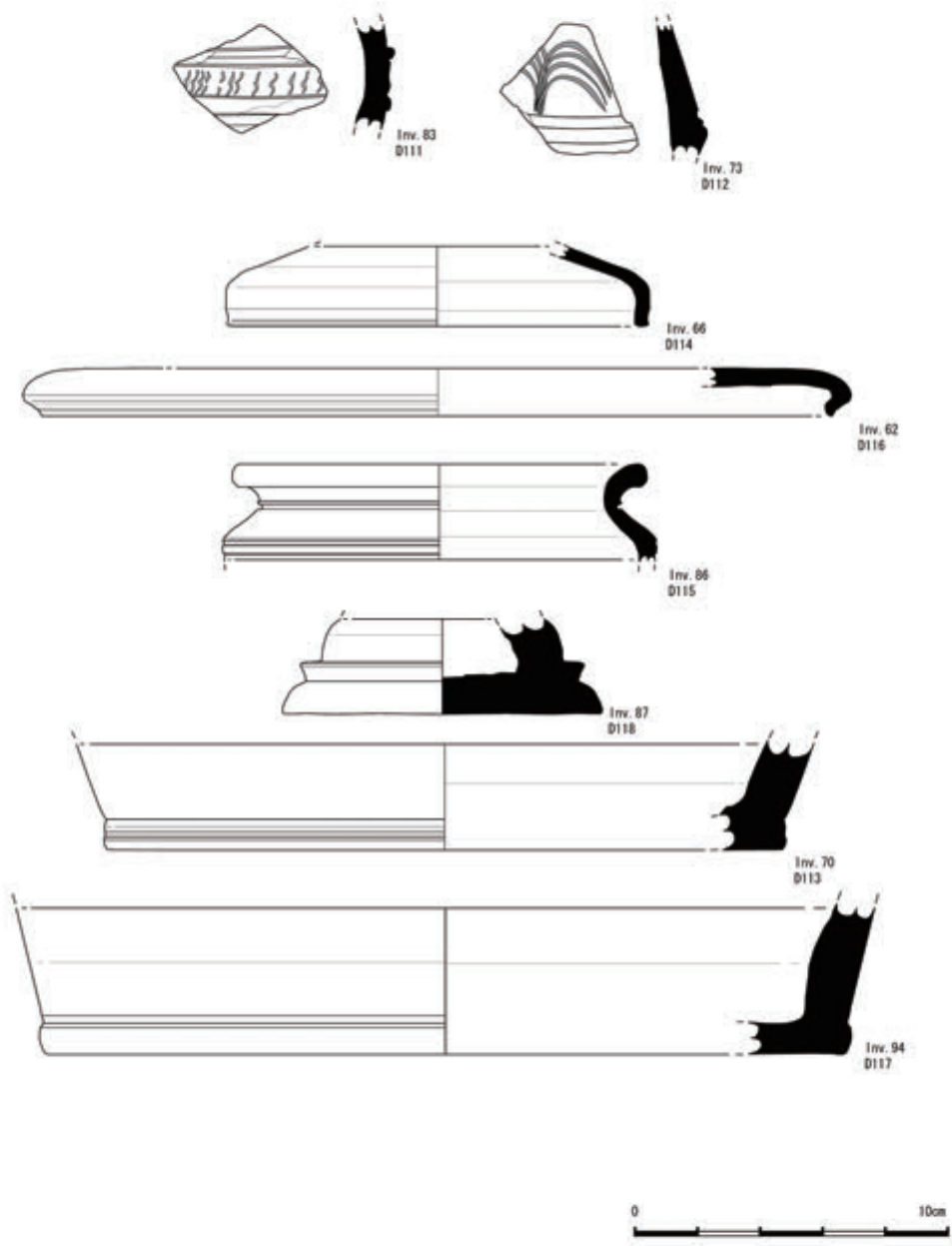


Fig.29 ター・トゥオット B 号窯出土遺物 1

Ta Tuot Kiln B Site

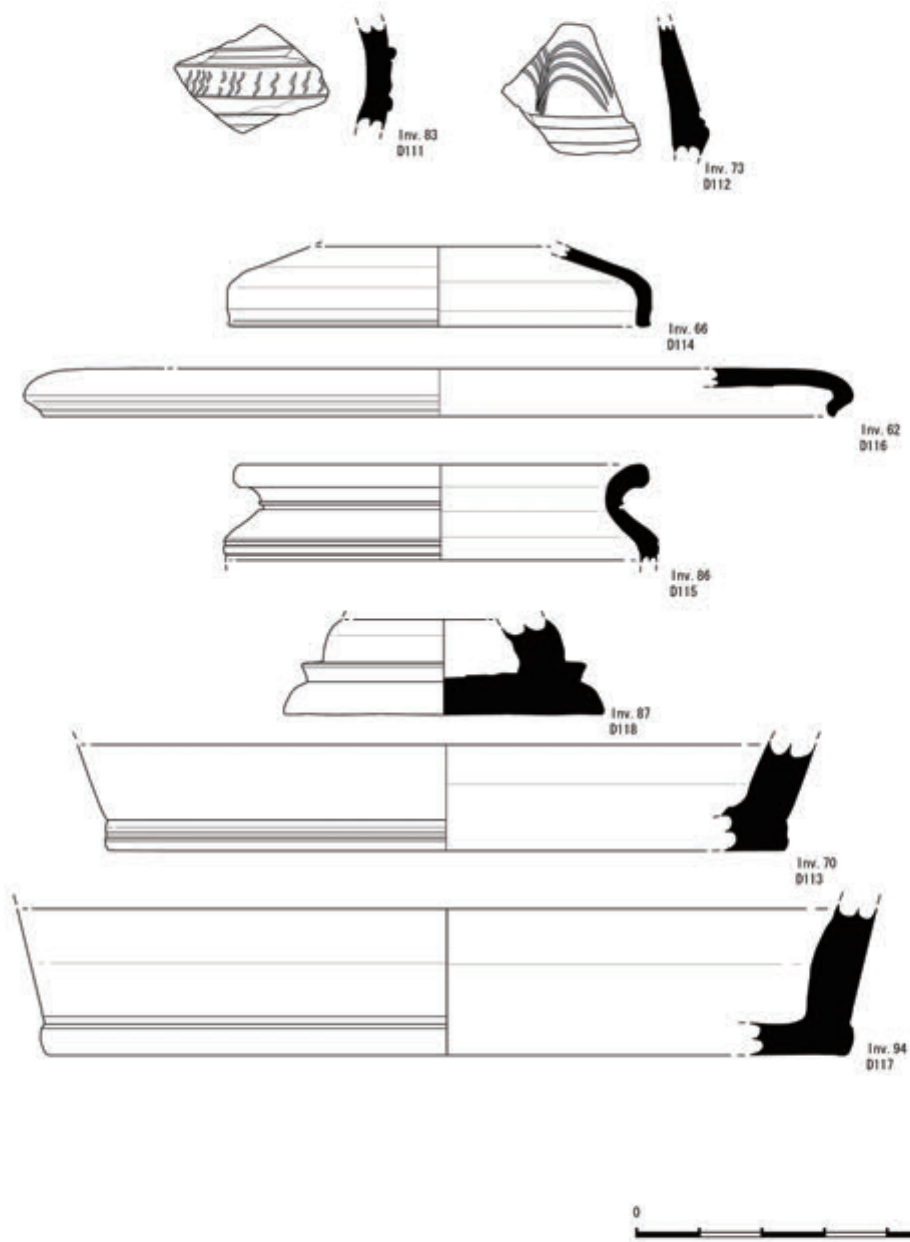


Fig.30 ター・トゥオット B 号窯出土遺物 2

Veal Kok Treas Kiln Site

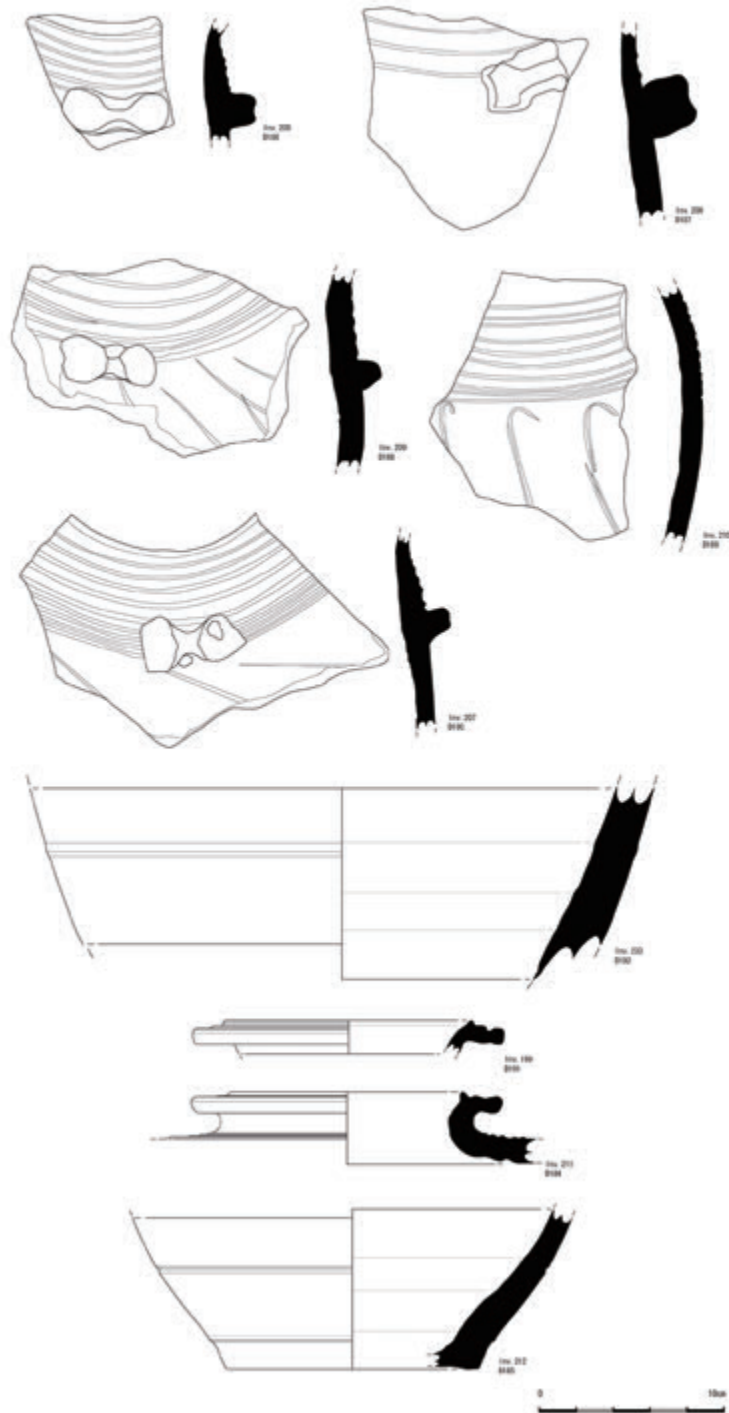


Fig.31 ヴィール・コック・トレア窯出土遺物

Veal Trac Chour Kiln Site

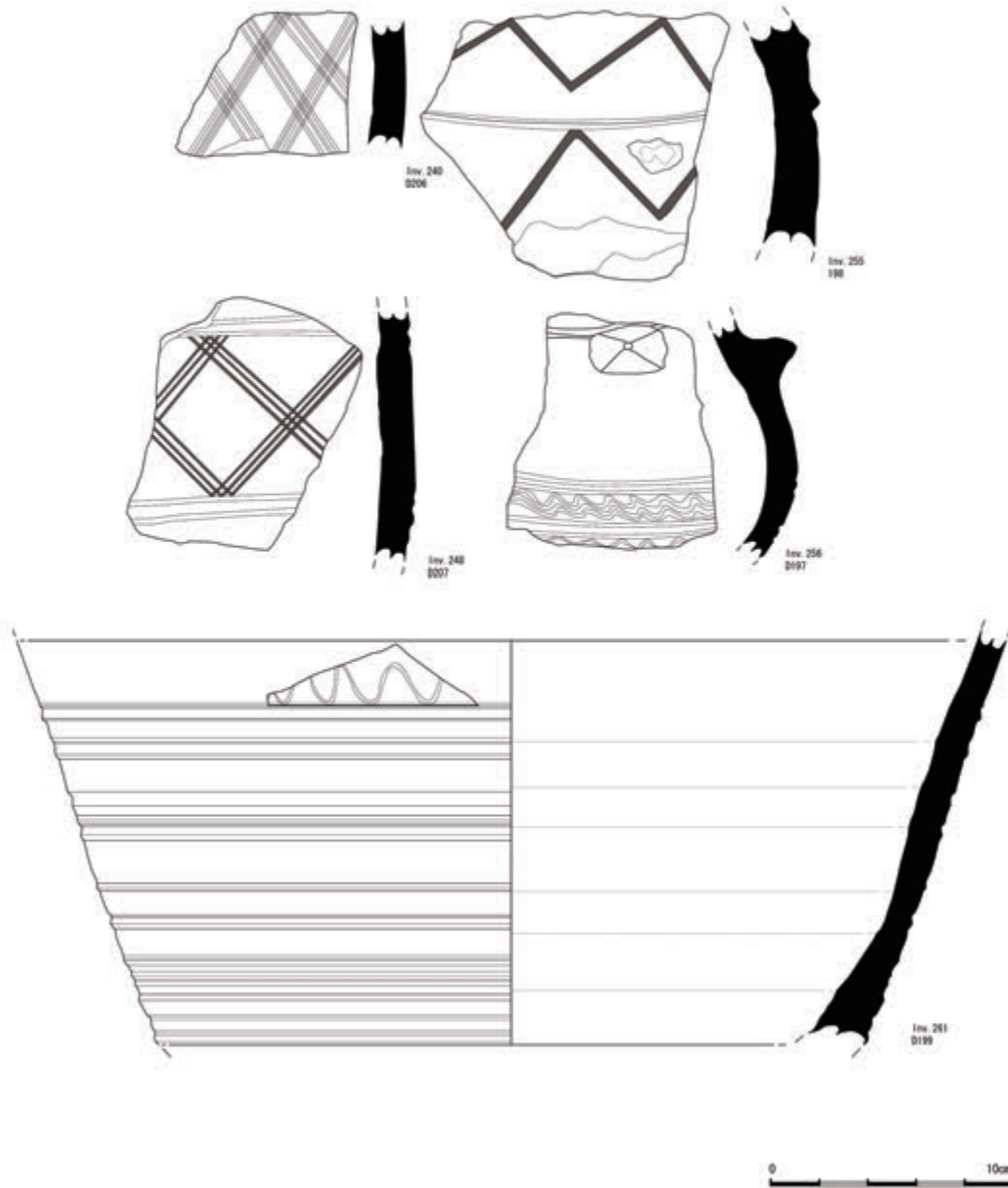


Fig.32 ヴィール・トラ・チュー窯出土遺物 1

Veal Trac Chour Kiln Site

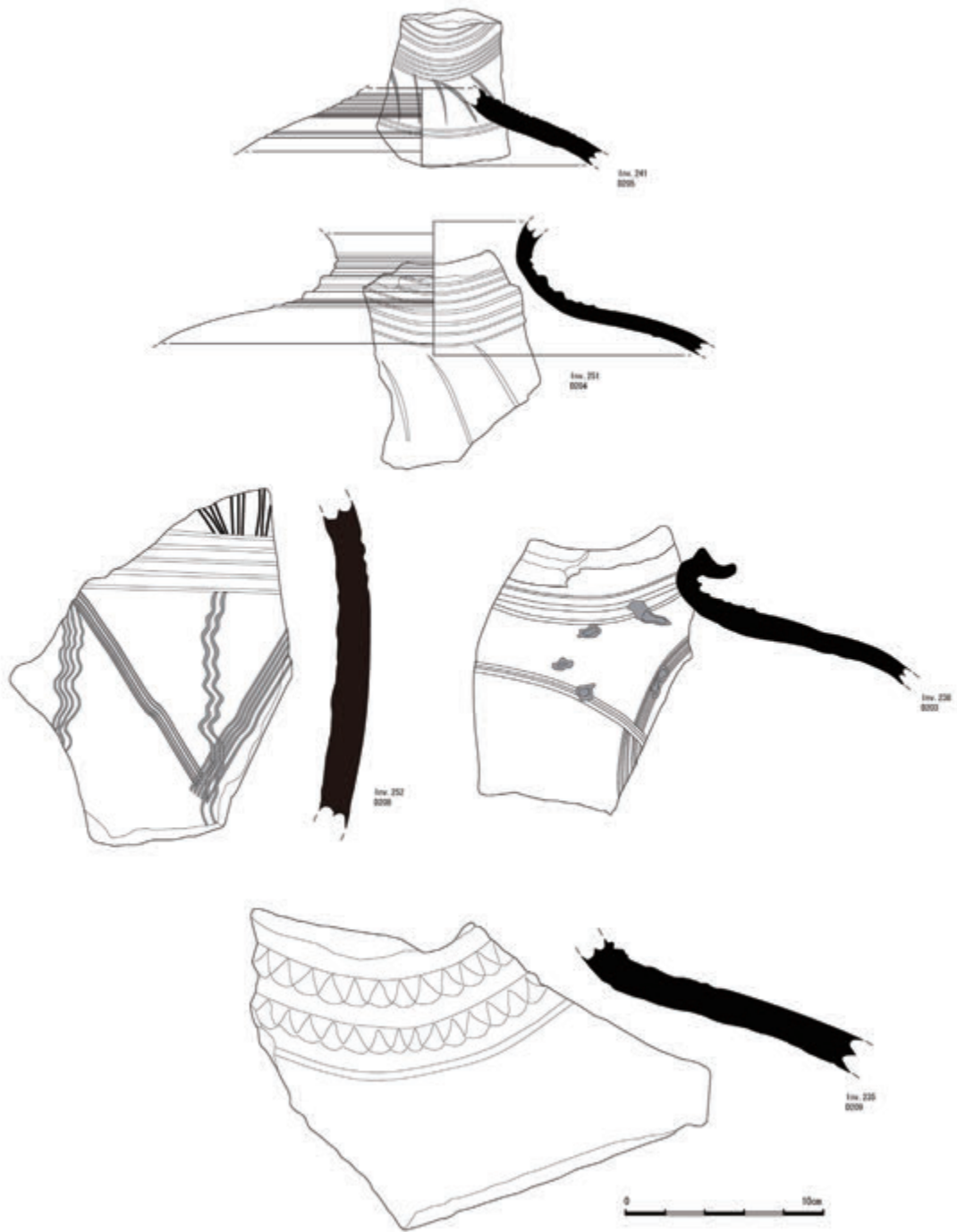


Fig.33 ヴィール・トラ・チュー窯出土遺物 2

Veal Trac Chour Kiln Site

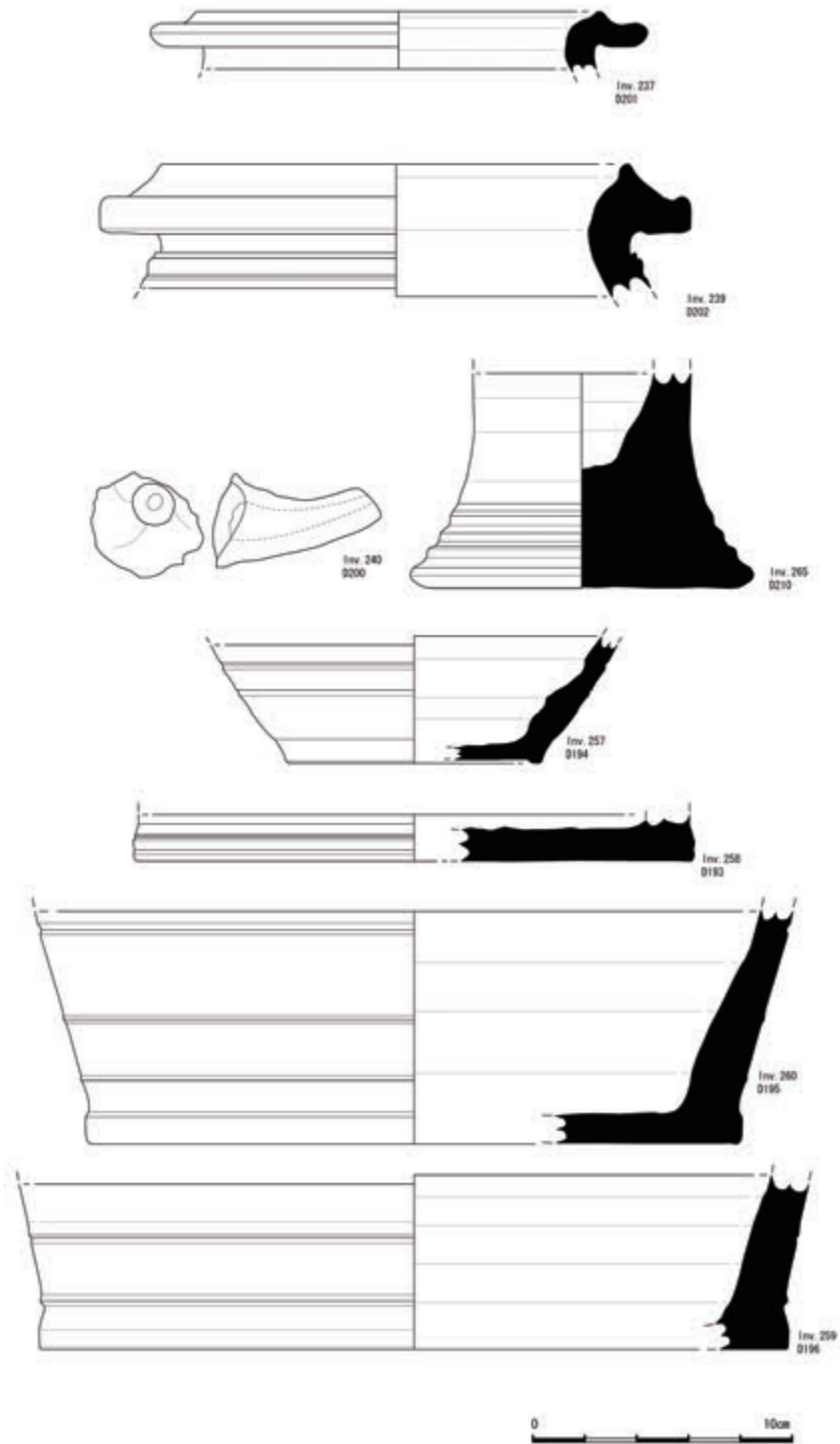


Fig.34 ヴィール・トラ・チュー窯出土遺物 3

Ceramic Fragments of Thlong A-Koang Site

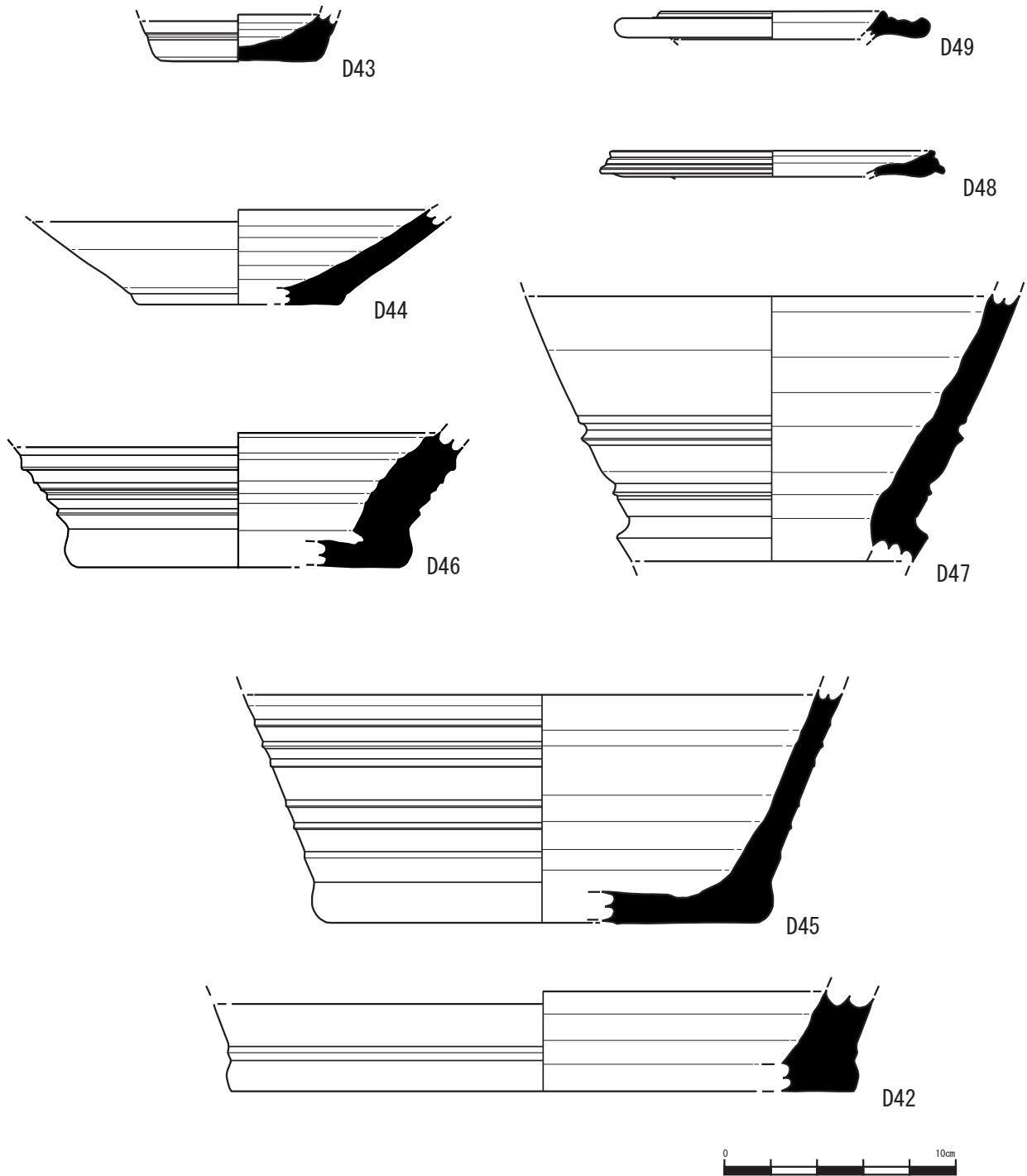


Fig.35 トロン・アコン遺跡出土遺物



Ceramic Fragments of Kok Chieng Mieng Site

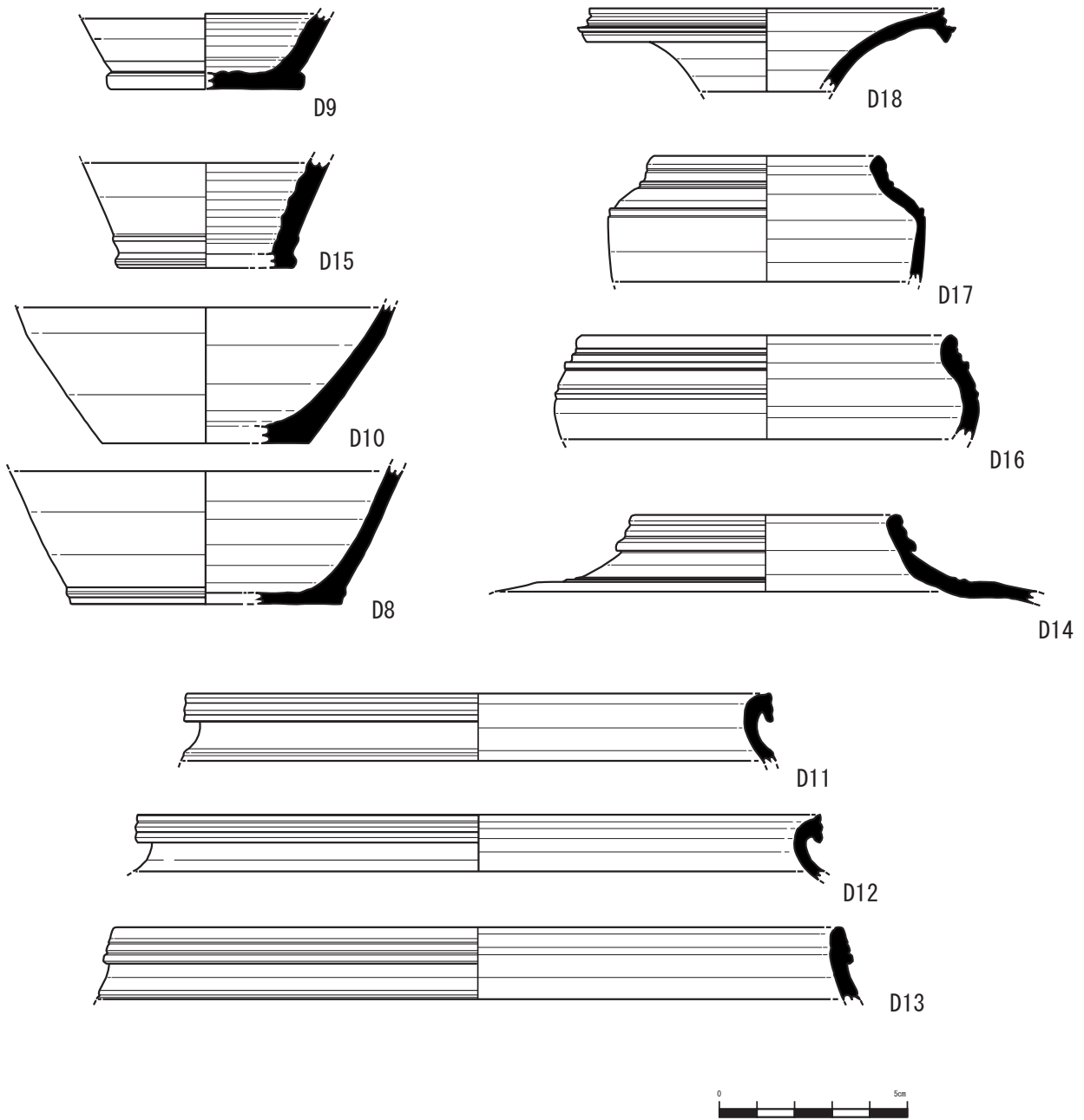


Fig.36 コック・チエン・ミエン遺跡出土遺物

Ceramic Fragments of Kok Dreal Site

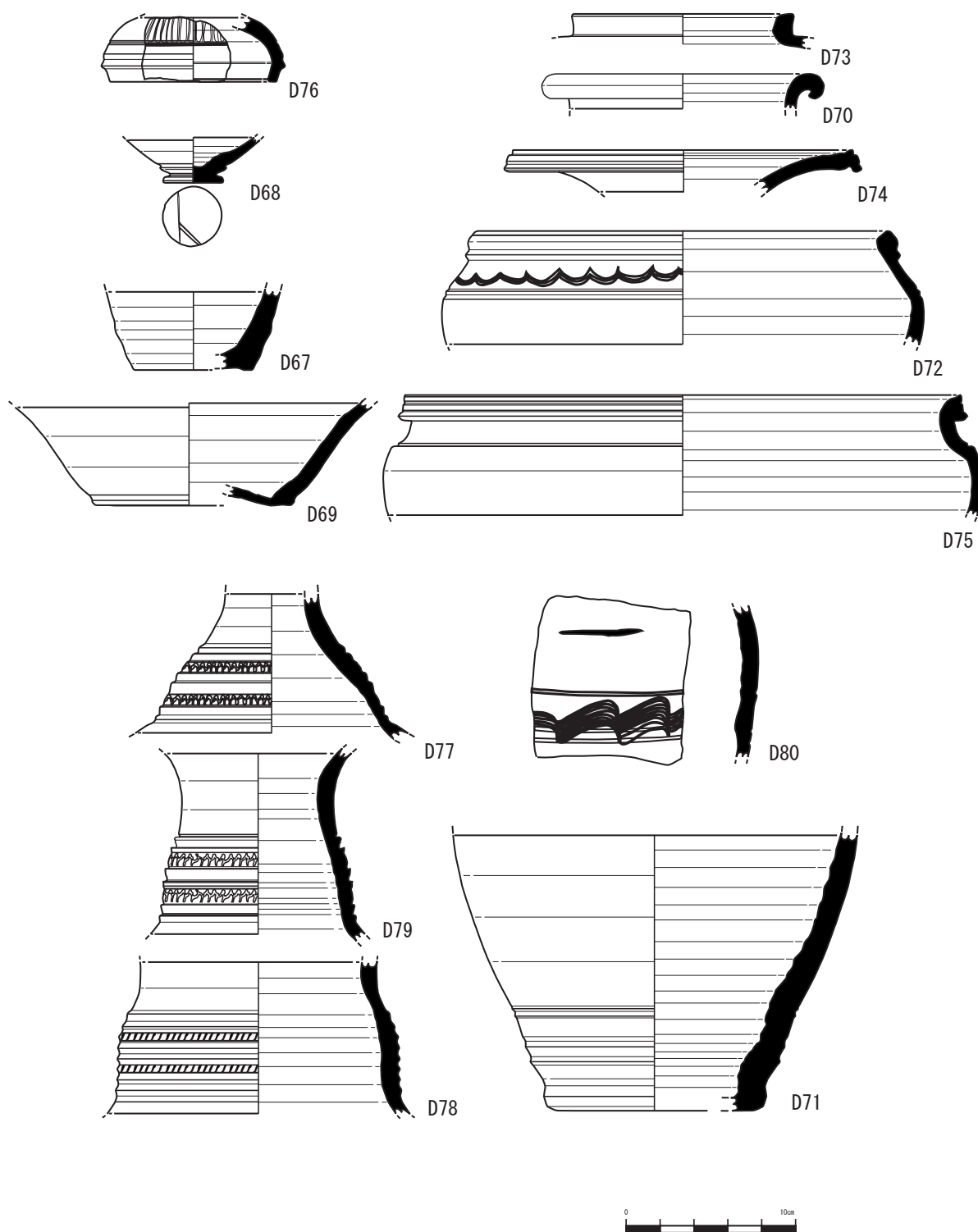


Fig.37 コック・トリア遺跡出土遺物

Ceramic Fragments of Kok Khjeay and Kok Yay Degn Sites

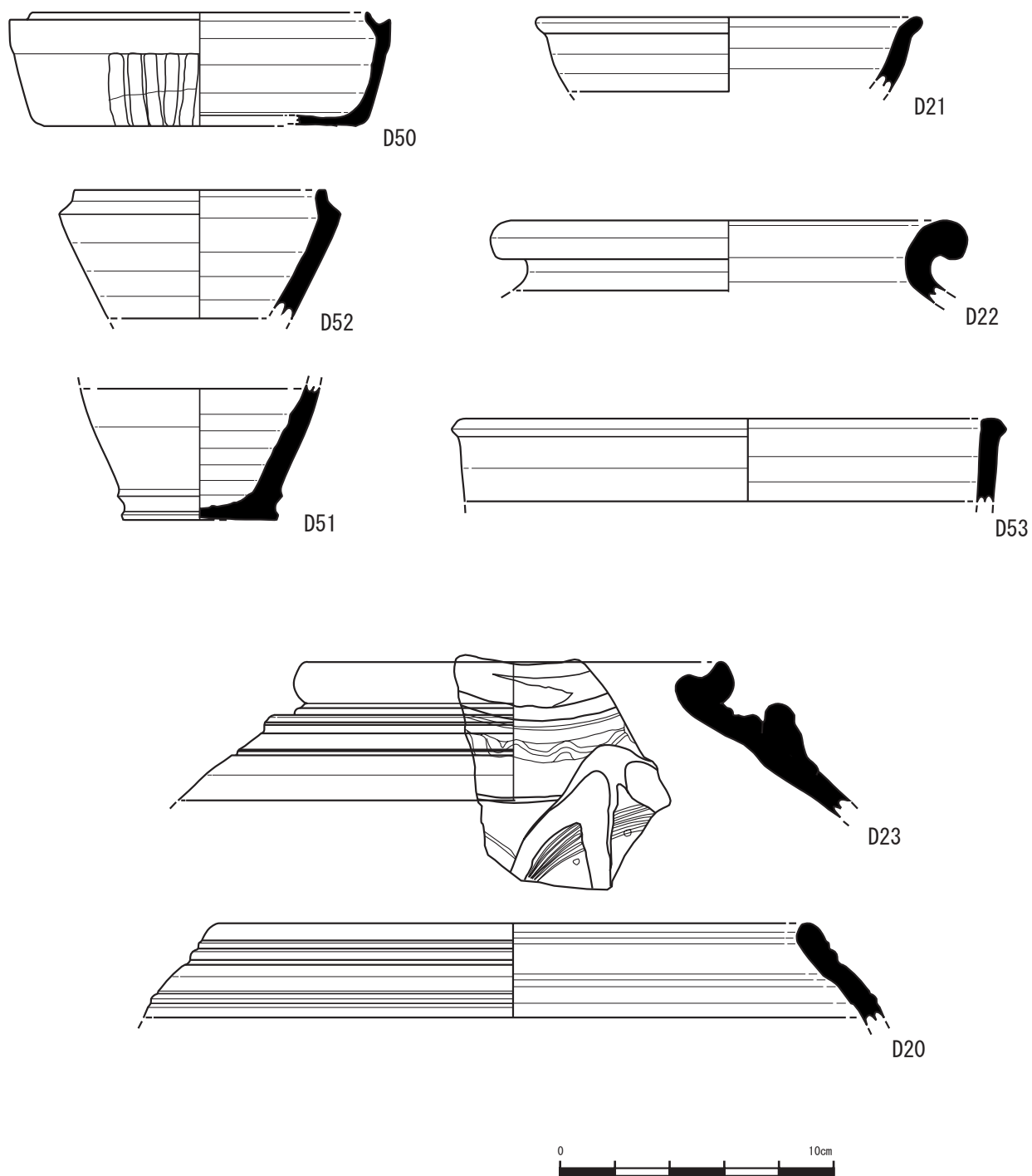


Fig.38 コック・クジェイ遺跡・コック・ヤイ・デン遺跡出土遺物

Ceramic Fragments of Kok Khjeay Site

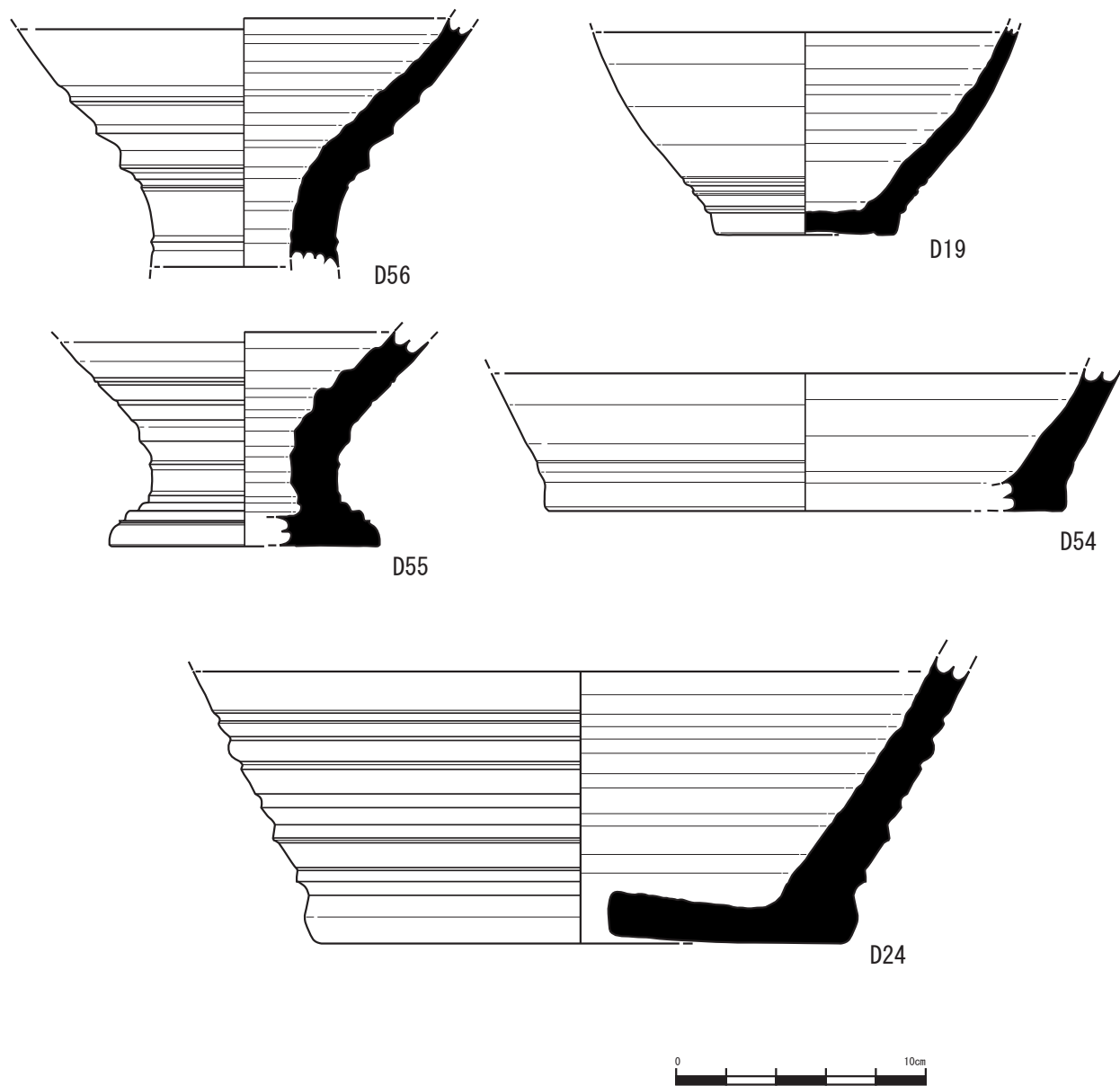


Fig.39 コック・クジェイ遺跡出土遺物

Ceramic Fragments of Kok Yay Degn Site

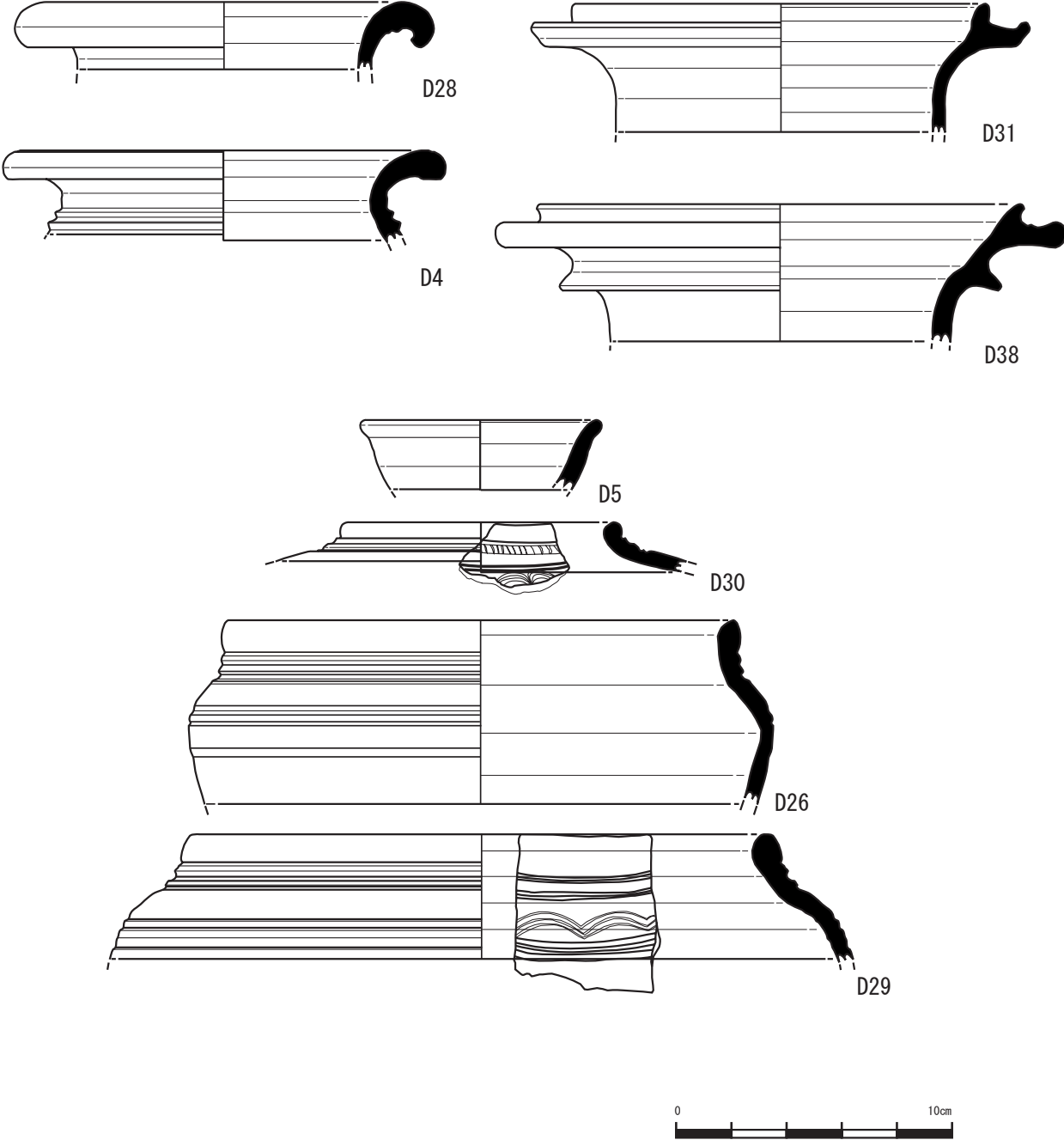


Fig.40 コック・ヤイ・デン遺跡出土遺物 1

Ceramic Fragments of Kok Yay degn Site

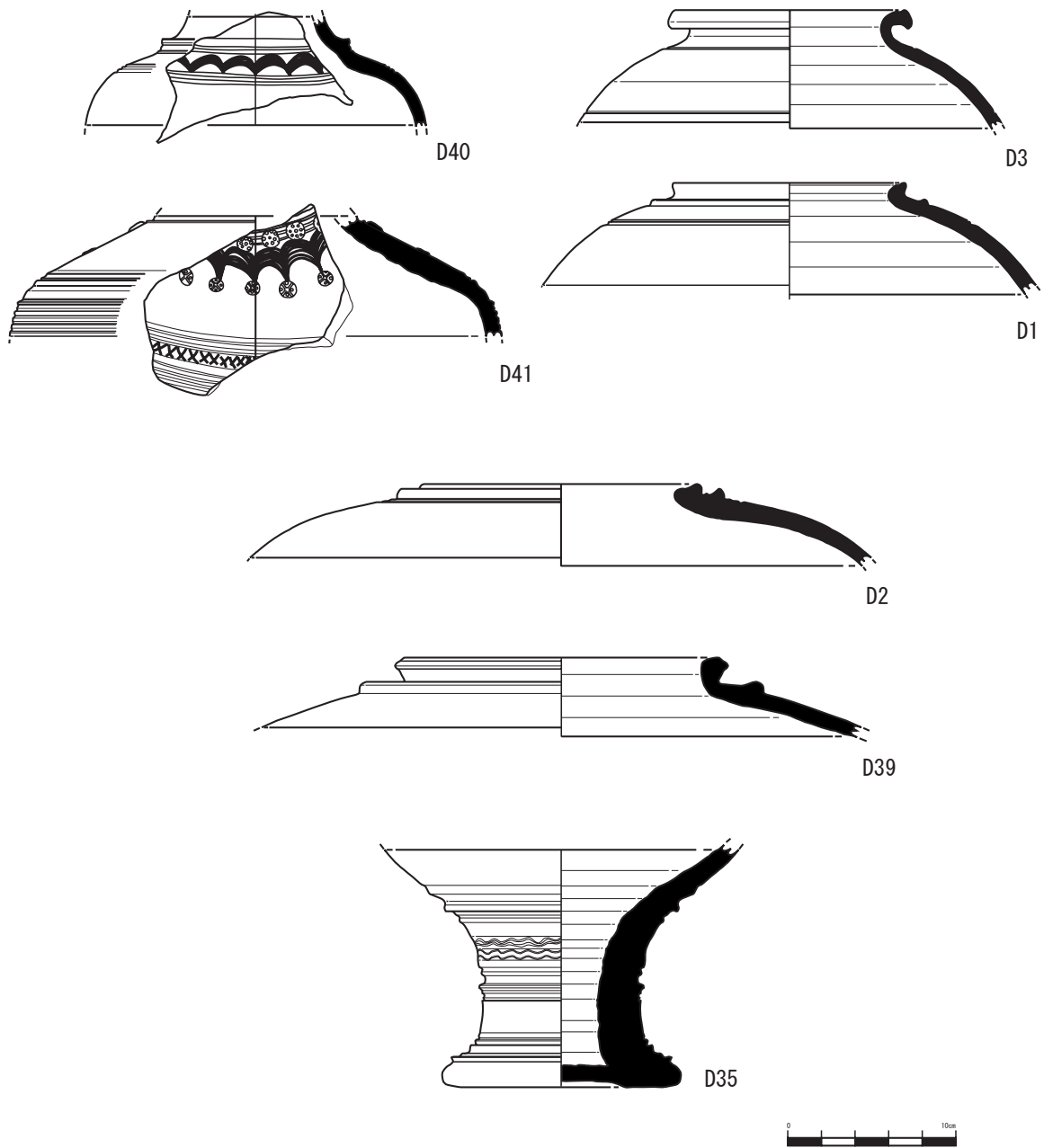


Fig.41 コック・ヤイ・デン遺跡出土遺物 2

Ceramic Fragments of Kok Yay Degn Site

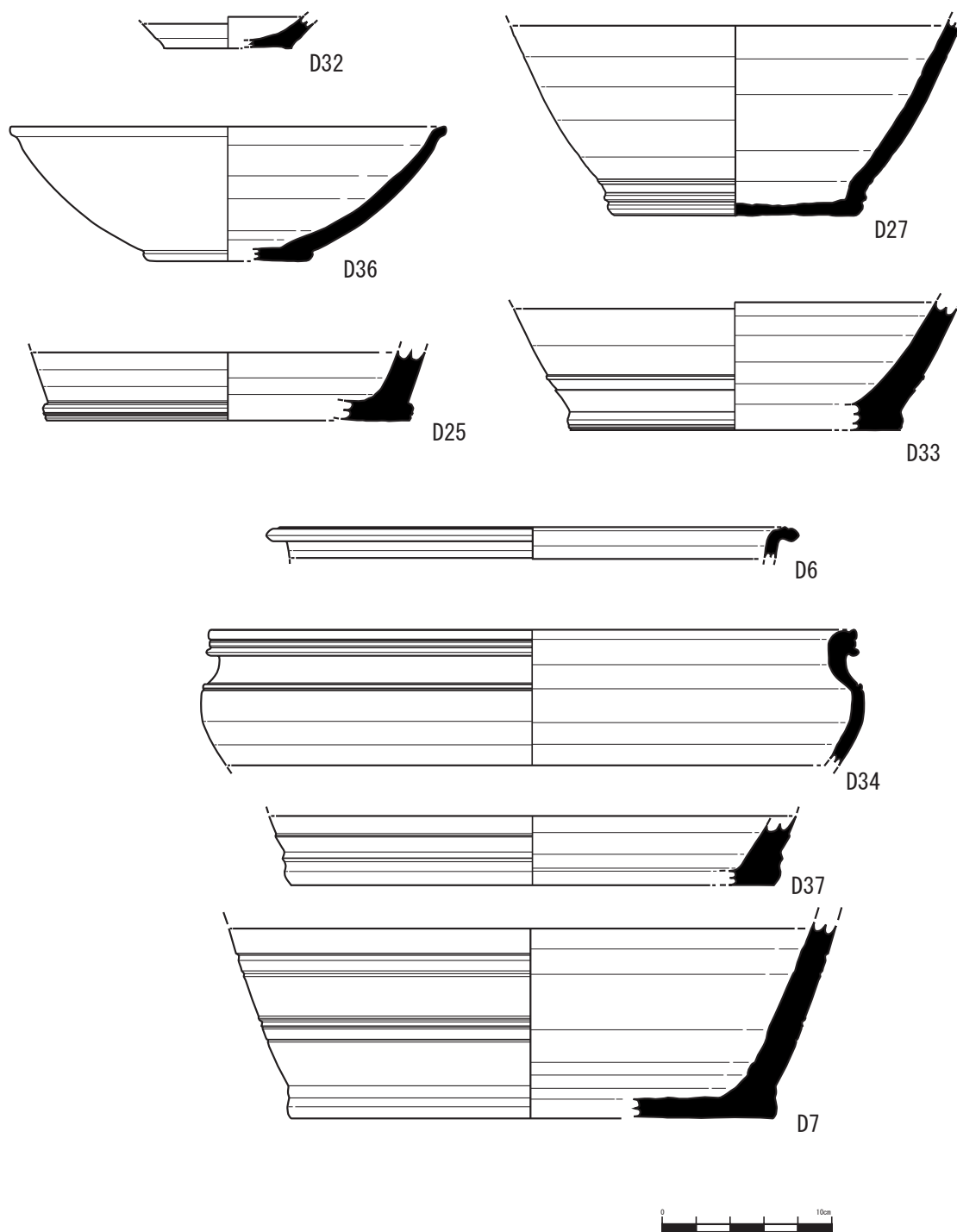


Fig.42 コック・ヤイ・デン遺跡出土遺物 3

Ceramic Fragments of Thlok Khtom Site

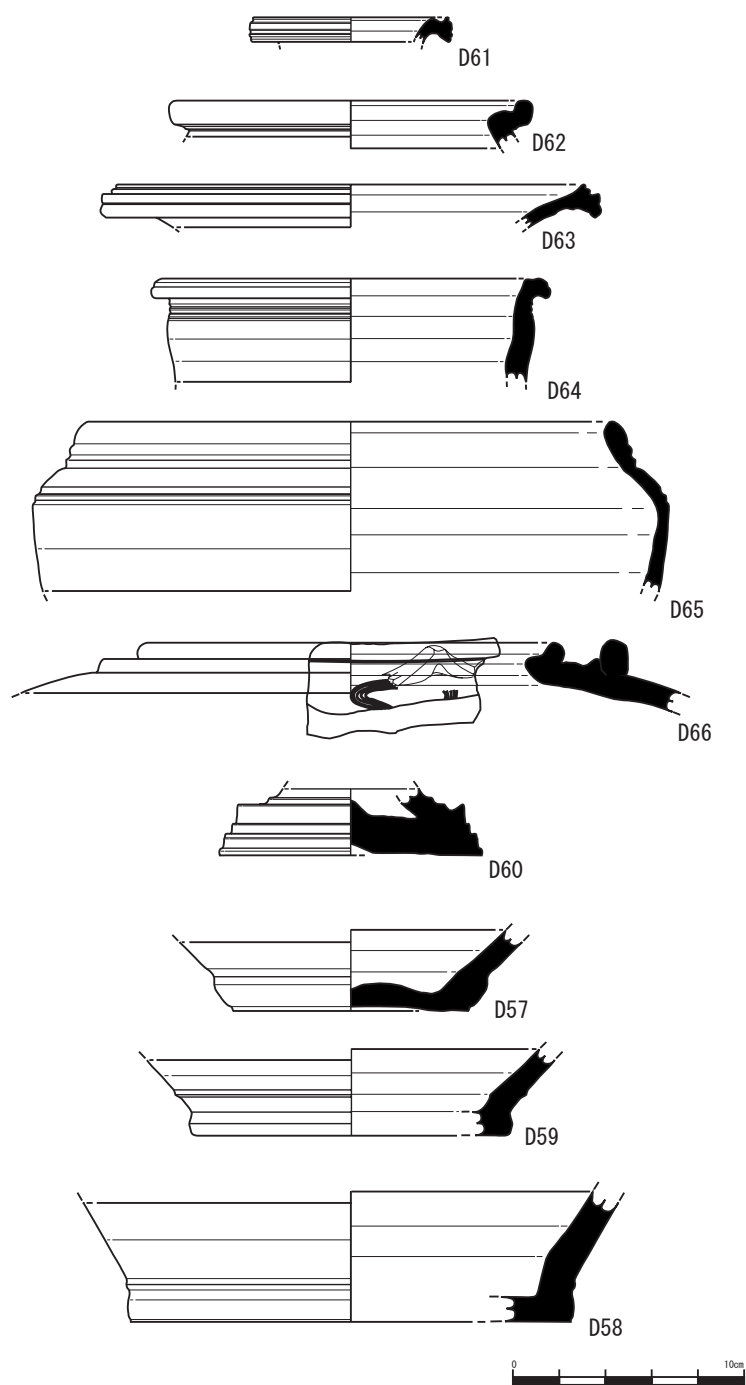


Fig.43 スロック・クドム遺跡出土遺物 1



Ceramic Fragments of Thlok Khtom Site

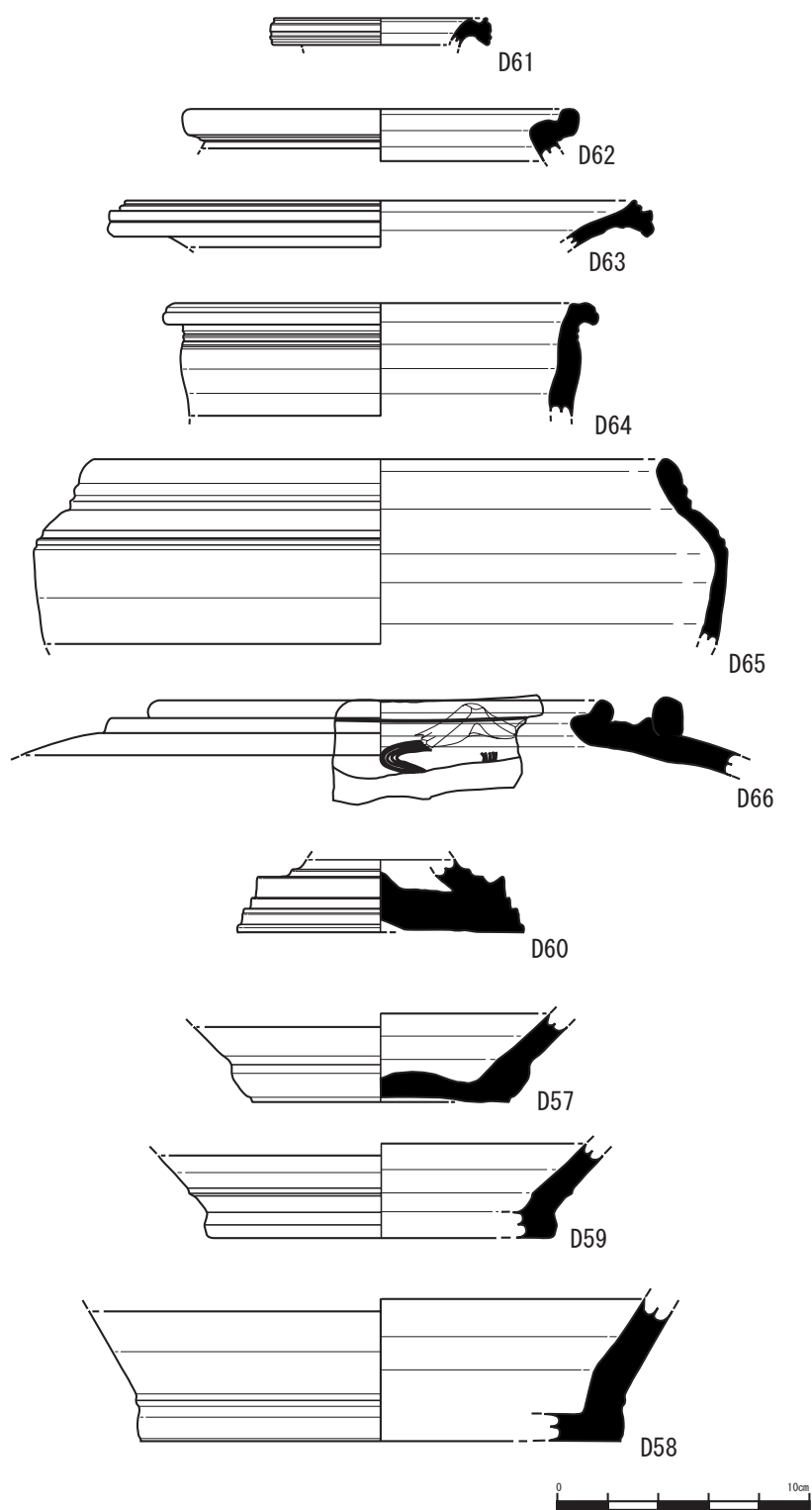


Fig.44 スロック・クドム遺跡出土遺物 2

Ceramics of Angkor Borei Museum

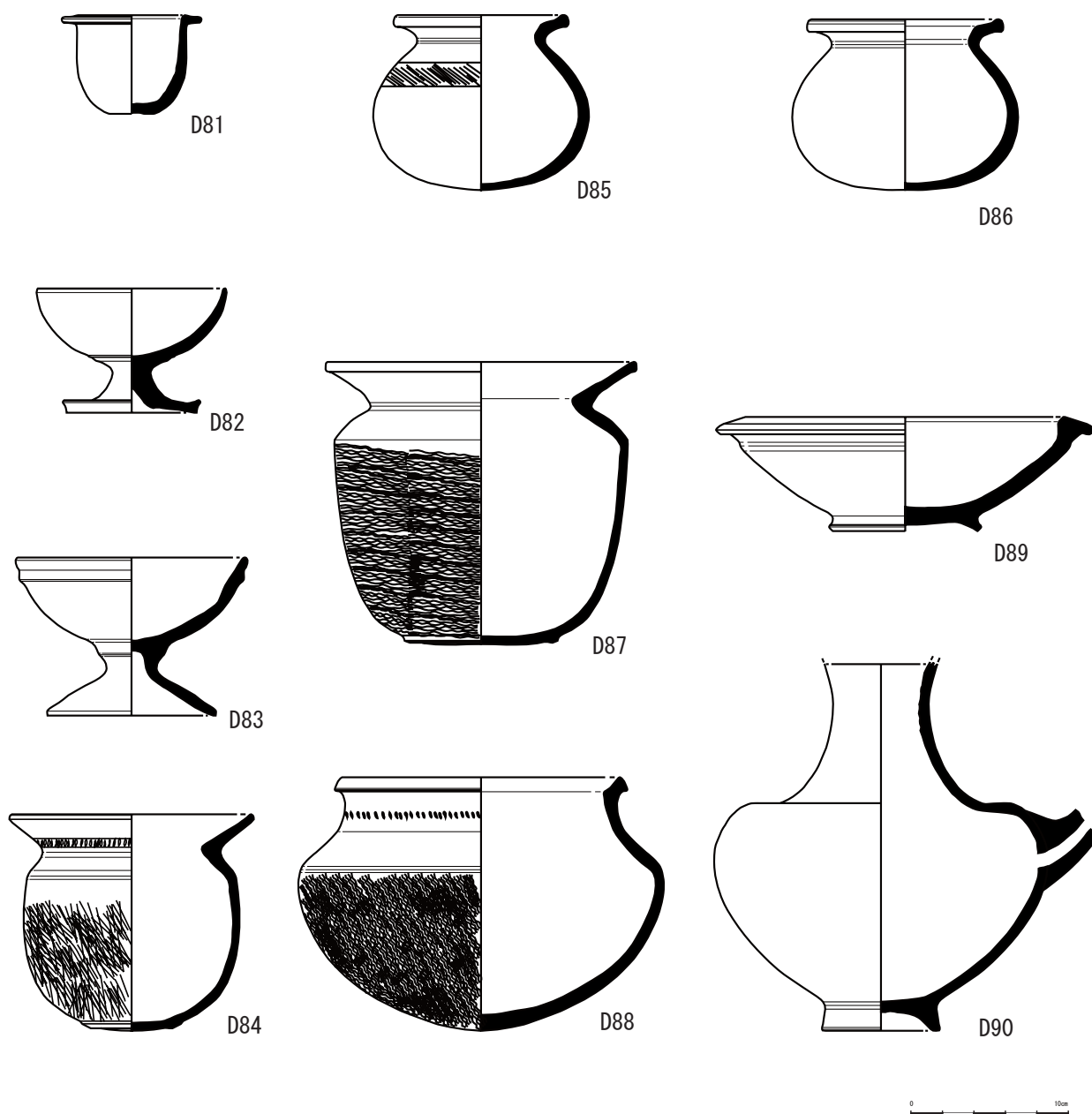


Fig.45 アンコール・ボレイ博物館所蔵遺物

2022年3月25日発行 発行/印刷

西トツプ遺跡調査修復 中間報告 11  
中央祠堂躯体部再構築編

著作権所有 奈良市二条町 2-9-1  
発行者 独立行政法人国立文化財機構  
奈良文化財研究所

印刷者 アイプリコム